あたしと彼の世界（続・あたしの世界）

小室　仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あたしと彼の世界（続・あたしの世界）

【Ｎコード】
Ｎ６３２３Ｘ

【作者名】
小室　仁

【あらすじ】
以前に書いた短編「あたしの世界」の続編になります。

模試の当日に高熱を出してしまった主人公。
遅刻した上に、痴漢に遭って落ち込んで、
やけになって蹴飛ばした空き缶が見知らぬ男の子に当たってしまう。
謝りもせず、逃げ出してしまったけれど・・・

その後のお話。

1（前書き）

お立ち寄り下さって、有難うございます。

この物語は、
以前に書いた短編「あたしの世界」の続編になります。
なので、短編の「あたしの世界」を読んで頂いた後、
こちらの連載を読んで下さると、状況がより良く分かるかと思います。

いつも私の拙い物語に付き合って下さって、
本当に、有難うございます。

1

いるんだ。
牛丼を食べる姿が、
こんなに綺麗な男の子って。

あたしは自分の分の牛丼を抱えたまま、
テーブルを挟んで前に座る彼の姿に、
じっと見入ってしまっていた。

彼は、見も知らぬあたしの財布を拾ってくれて、
学校の校門までわざわざ届けに来てくれた、
隣町の男子校の男の子。

その上、無様に転んで鼻血を出した私に、
自分のハンドタオルまで貸してくれた。
そんな優しい彼が、お礼などいらないというのを無理やり引き止めて、
あたしは彼に牛丼をご馳走していたのだった。

背が高くて、かっこよくて、優しくて。

こんな男の子って、漫画の中だけじゃなくて、
本当に存在しているんだな。
第二ボタンまで開けてる学らんが、
妙に垢抜けて見える男子なんて、
初めて見たかも。

目の前の彼を見て、
あたしは改めて、感動していた。

肩くらいまである長めの黒髪は耳にかけてあって、
少しふわりと全体的にウェーブがかかっている。
これはパーマなんだろうか。
それとも、もともとのくせ？
どっちにしろ、とても良く彼に似合っていた。

自分の手の中のどんぶりを見ている、
伏せ目がちの彼の切れ長の目、
その睫毛の長いことったら。

あたしの視線が気になるのか、
ふっと彼が目を上げるのに、
あたしは慌てて自分のどんぶりに視線を落として、
まるで彼なんて見ていない振りをする。

けれど、彼が私から視線を外すのを待って、
あたしはまた彼に、こっそりと視線を戻すのだ。

箸を口に運ぶ仕草も、うっとりとしてしまうほど。
何でなんだろうと、じっと彼の手先を見ていたら、
理由が分かった。
指が長くて、綺麗なのだ。
まるでピアニストみたい。

切れ長の二重の瞳。
日本人離れしているような、すっと通った鼻筋。
そしてなんて広くて形のいい唇なんだろう。
ご飯粒がつくのまでが絵になる。
そして、その唇についたご飯粒を、
ひとさし指でぞんざいに口の中に入れる。
そんな仕草が、本当にさまになるのだ。

「ねえ、どうしてあんた食べないの？」
彼が不意に、あたしを見て言った。
「は、はいっ？」
急に話しかけられて、現実に引き戻され、
あたしは思い切り裏返った、素っ頓狂な声で返事をしてしまう。

「全然、減ってないじゃん」
不思議そうな表情で、あたしとあたしの手の中の牛丼のどんぶりを見比べて、
彼は言った。

こんなにかっこいい男の子の目の前で、
わしわし牛丼食べられる女子がいたら見てみたい。
と、あたしは心の中で思うけれど、
もちろん、口に出せるわけもなく。

「な、なんか胸が一杯で」
あたしはかろうじて、
自分の本心に近い気持ちを、しおらしく口にした。
彼はそんなあたしを見ると、
「肉、しっかり食っといた方がいいんじゃない？
あんた、さっき大出血してたし。栄養、ちゃんと補給しとかないと」
プッと小さく笑って面白そうに言った。

彼のその小さい笑いに、
それまでの自分の、
物凄い失態を再び思い出して俯いてしまうあたしに、
面白そうなのはそのままだったけれど、
彼は「ごめん」と言った。
彼の言葉に、あたしは大きくかぶりをふる。
あたしが彼に謝られる事なんて、何一つない。

彼にとって、あたしの初対面の印象は最悪だったろう。
あの日、あたしは痴漢にあって面白くなかったからと、
八つ当たりして公園で蹴飛ばした缶を、
芝生で寝転がっていた彼に当ててしまったのだ。
謝りもしないどころか、彼を睨んで逃げたなんて本当にあり得なかった。

その上、その時にあたしが落とした財布を拾って、
次の日つまり今日、わざわざ学校まで届けてくれた彼を、
うちの生徒がたくさんいる前で、
つまづいた弾みとはいえ、押し倒して一緒に道路に転ばせてしまったし、
そして、みっともないことに、
あたしはそこで、鼻血まで出したのだ。
最後は、その鼻血を拭くハンドタオルまで彼に借りてしまう始末。

その血のついた彼のハンドタオルは、
今あたしのポケットに入っている。
鼻血が止まるまでに、さんざん真っ赤に汚れてしまっていた。
違うものを買って返さなければ。

そこで、あたしは改めて思った。

こう思い返せば、

あたしには、彼に対して失う物などもう何も無いのだ。
最初から、彼にとってあたしは、
全てがマイナス要素の塊なのだから。

ただ、彼は優しいから、
どうしてもお礼をしたいというあたしの誘いにのって、
こうして一緒に牛丼を食べてくれているだけ。

目の前の素敵な彼とあたしがどうのこうのと夢を見るなんて、
そんな資格すらないのだ。

そう思ったら、あたしは一気に肩の力が抜けた。

大体が、あたしが目の前の男の子の立場だったら、
こんなおっちょこちょいの、
すっとこどっこいの他校の女子なあたしに、
いらないと言ったのにもかかわらず、
無理やり牛丼を奢られているのだ。
一刻も早く食べ終わって、帰りたいと思っているところだろう。

あたしがスタイルなんかばっちりで、
彼に似合うような物凄い美人だったら、話は別なんだろうけれど。

どこからどうみても、標準タイプのあたし。
ブスではないと信じたいけど、
だから何？くらいの特徴ナッシングな凡人なのは、
あたしが一番良く知っている。

あたしは小さく息をつくと、
牛丼を箸ですくって口の中に入れた。
早く食べ終えて、彼を解放してあげなければ。
うなだれつつ、仕方なく牛丼を食べる。

ふと、彼が言った。
「なんか、本当に食欲なさそうだね」
彼の丼はいつの間にか空になっていて、
テーブルに片肘をついて、あたしを見ていた。
乗り出しているようなその姿勢のせいで、
さっきよりも、彼の顔がぐっとあたしに近い。

ドキリとうろたえて、
あたしは彼から視線を落とすと、
口の中のご飯を何とか飲み込んだ。

「悪かったね、腹減ってないのに牛丼屋に付き合ってもらって」

彼の言葉に、あたしは顔を上げると、
ぶるぶると勢い良く首を振る。
「とんでもない！あたしがどれだけ、
あなたにご迷惑をおかけしたか！」
テーブルの上に乗り出すように、あたしは心から力説する。
と、彼の顔に自分から近づくような形になって、
あたしは自分の心臓がキュと音を立てるのを知ると、
椅子にそろそろと座りなおして、俯いて続けた。
「牛丼なんて何杯ご馳走しても足りないくらいで……」

私が恐る恐る彼を見て言うと、彼はにこりと笑った。
「それ、食べないなら、頂戴？」
しばし、瞬きをして、あたしは彼の顔を呆けたように見つめた。
「え？」
「俺食べるから」
言われた意味がまるで外国語のように頭に入ってこない。

彼は今度はあたしの持つ食べかけの丼を指差して、
もう一度、同じ言葉を言った。
「それ、食べないなら頂戴？俺食べるから」

あたしは自分の手の中の食べかけの丼を見下ろす。
三口程度しか口をつけていないとはいえ、
食べかけは食べかけだ。

彼はあたしに向かって、手のひらを上にして手を差し出した。

大きな手のひら。
丼なんか片手で簡単に持てそうなほど。
なんて事を心の中で思ったら、
いつの間にか、あたしは自分の丼を、
彼の手のひらに乗せていた。
そして、あたしは自分がしたことに改めて驚く。

けれど彼はなんてことなく丼を受け取ると、
食べ終えた自分の丼の上に乗せていた箸をもう一度持ち、
あたしの食べかけを食べ始めた。

美味しそうにあたしの食べ残しを食べる彼に、
あたしは自分の顔が火照るのを感じた。
耳まで真っ赤だ。

恥かしいのか、嬉しいのか。
こんな気持ちはなんて言ったらいいんだろう。
単純に、あたしはうろたえていた。

彼は単に、
もったいないと思って食べているだけ。

この世には食べられない貧しい人たちが、

たくさんいる。
だから食べ物を残すなんて、本当にしちゃいけないこと。
そういうもったいないという気持ちだけで、
彼はあたしの食べかけを食べているだけなのだ。

なんて、自分に言い聞かせるけど、
もし、あたしが彼の立場だったら、
あたしみたいな良く知りもしない、
すっとこどっこいな女の食べかけなんか、
絶対食べないだろう。

じゃあ、何で?どうして、彼はあたしの食べ残しを食べてるの?
と、ここまで来るとまた、最初のもったいないに戻る。

なんて事をぐるぐると心の中で考えていたら、
彼はすっかり食べ終えてしまって、
「ご馳走様」
あたしに向かって、
無邪気に両手を合わせて見せたのだった。

その無邪気さも、まるで計算されているかのようで、
ある意味芸術だった。
こんだけイケメンの男の子に無邪気にお礼を言われたら、
この世の女と仕分けされる人間は、
一人として、ノックアウトされないものはいないに違いない。

一体彼は、
どんなお家に住んで、
どんなご両親に育てられたんだろう。

もしかしたら、ギリシャ神話の神様みたいな、
美しいご両親から生まれたのかもしれない。
そして大事に大事に育てられた王子様。

などと、思い出すのも恥ずかしいような、
大げさな想像を心の中でしていたのだけれど、
その時はひた隠しにして、
あたしは彼に小さく呟くように言ったのだった。
「どういたしまして」

牛丼屋のドアを出ると、もう一度彼は言った。
「本当にご馳走様。美味しかったよ」
普通のチェーン店の普通の牛丼だったけれど、
まるで高級料亭でご馳走を食べたみたいに、
彼は気持ちを込めて言ってくれる。

「こちらこそ、わざわざ学校までお財布届けていただいて、
本当に助かりました。なんか、
その他、たくさんご迷惑もかけたのに、
親切にして頂いて、本当に嬉しかったです」
あたしは制服の腰を折って、
心から謝罪の気持ちを込めて彼にお辞儀をした。

お互いの間に少し沈黙が流れた後、

「じゃあ」
彼が言う。

もう、お別れなんだ。
瞬間、あたしの心が痛む。
だけど、あたしは動けず、何も言えず、
ただかすかに、唇に笑みを浮かべるのがやっとだった。

きっと、彼はさっさと去っていくのだろうと思っていたら、
何気に今出てきた店の中などを見ていて、
しばらく、あたしの前から歩き去る様子がなかった。

そこで、あたしは彼に貰った鼻血を拭いた、
ポケットの中のハンドタオルを思い出して、
慌てて口を開いた。

「あの、借りたハンドタオル、新しいのでお返ししたいのですけど、
学校の方にお返しに伺ってもいいですか?」
おずおずと言いながら、自分で言った事を想像してぞっとする。

隣町の彼の通う男子校の校門の前で、
まるで彼がやったように、
女子高の制服で注目を浴びながら、あたしは彼を待てるのだろうか。
いや、やってみせる。

やらなきゃいけない。というか、実はやってみたいというのが、
本音かもしれない。
彼が嫌でなければ。

ああ、でもきっと、
彼の事だ、いらないと言うのかもしれない。
鼻血を出した時にあげると言われたのだし。
そしたら、本当にもうお別れだ。

彼の次の言葉を、目をつぶるようにして待っていると、
思いもつかなかった言葉を、彼は言った。

「今週の土日、うちの高校、文化祭なんだけど、
遊びに来ない？俺、バンドやってるんだ。
ビートルズのコピーバンドだけどね。演奏やるから見に来てよ」

一瞬、あたしはポカンと彼の顔を見上げる。
高い背、多分１８０センチ近くはあるんじゃないだろうか。

「はい」
あたしが間の抜けた返事をすると、
彼は満面の笑顔になった。

「で、あんた名前はなんていうの？まだ聞いて無かったよね。
俺はＹ高、三年の上月大志」

上月大志さん。こうづきたいしさん。
なんて、彼にぴったりな名前だろう。

そして、その後、
あたしはあたしの名前をおどおどしながらも、
ちゃんと答えたのだった。

こんな事って、人生に起き得るのだ！
平々凡々な普通の女子にも。
というか、彼にとってはあたしは普通以下のマイナス女子だった。

空き缶蹴りつけたあたしなのに、
鼻血出したみっともないあたしなのに、
それでも、文化祭に誘ってくれるの？
奇跡だ！

その後、あたしと彼は牛丼屋の前で別れた。
でも、次に会う約束はしている。
そう思ってもいいんだろうか。

M女子高、三年　内藤さえ。

あたしは自分の名前を誰かに教える時、

こんなにどきどきしたのは、初めてだった。

教えたあたしの名前を、彼はどう思っただろうか。
さえない見た目どおりな名前だと、
意地悪な人には笑われたこともある。
でも、彼は笑わなかった。

あたしが名残惜しく、
牛丼屋から去っていく彼の学ランの背中をずっと見送っていると、
彼、大志さんが思い出したようにあたしを振り返り、
小さく手を上げてくれた。
心臓が飛び上がるように驚きながらも、
あたしもおずおずと小さく手を振り返す。

まるで、彼氏彼女みたいじゃない。

にやけっぱなしの腑抜けな顔で、
あたしは帰路についたのだった。

2

母親はまだ再婚相手と旅行中だったから、
牛丼屋からまだ誰もいない家に戻ると、
あたしは真っ先に、
それまで長い間、口も利かなかった奈津美に電話をしたのだった。

本日、二回目のドキドキだ。

大志さんが財布を届けてくれなくて、
あたしのあの不恰好な鼻血の場面を見かけなければ、
奈津美もあたしに声をかけてはこなかっただろうし、
あたしもこの頑固な性格から、
奈津美には、自分から電話をかけるなんてこともしなかっただろう。

三ヶ月前に出来ていた彼氏の事を、
奈津美はすぐに私に話してくれなかった。
親友だと思っていた私は、
それに腹を立てて、奈津美と口をきいていなかったのだ。
だけど、大志さんと校門で話をしていたときに、
奈津美はあたしに声をかけてきたのだった。
「彼氏？」

勿論、彼氏なんかじゃなかったけれど、
でも、そんな事は奈津美にはわかりっこない。
けど、奈津美はちっとも怒った素振りもなくて、
それまでずっと、彼氏という存在を隠していた、

奈津美に腹を立てていた自分が、
なんだか物凄く子供っぽく見えてしまったのだった。

だから、今日、
奈津美に電話をかけて、彼女が出たら、
真っ先にあたしは言おうと思っていた事があった。

「さえ？」
呼び出しの音が止まると、
途端に、奈津美の明るい声が受話器から飛び出てくる。

あたしは一瞬遅れて、どうにかこうにか、
思っていた言葉を口に出した。

「奈津美、ごめんね。あたし」
そこで不覚にも、言葉が詰まってしまう。
今までの、あたしの子供っぽい怒りによる仏頂面の無視も気にせず、
毎日学校で、奈津美は明るくあたしに朝の挨拶をしてくれていた。
そして、今もこうして明るく何事も無かったように、
電話に出てくれているのが、
本当に嬉しかったし、申し訳ない気持ちで一杯だったのだ。

「さえ、私こそ、ごめん。
本当は彼氏が出来たら一番先に、さえに言わなきゃいけなかったのに、
ずっと言いそびれちゃって。だって、ほら、さえ言ってたじゃない？」

奈津美の言葉に、あたしは曖昧に相槌を打って先を促す。
「彼氏にしたい人が出来たら、付き合う前にお互いに見せて、
お互いが認めたら、付き合うことにしようって」

奈津美の言葉に、あたしは脳みそをフル回転して、
そう言えば以前、そんな事を言った気がしたのを思い出した。

「さえに了承を得る前に、
告白された時に勢いで、私今の彼とお付き合いＯＫしちゃったから、
なんか、言いづらくて、それでずるずる三ヶ月経っちゃったの。
本当にごめん」

あたしは受話器越しに、あんぐり口を開けてしまった。

奈津美があたしに彼氏が出来たと言い辛かったのは、
あたしのせいだったのか！

「あたしが全部悪いんじゃん！
大体、お互いの彼氏はお互いが認めた相手だけなんて、
勝手に決めたあたしって、どんだけっての？
ああ、もう本当に自分が嫌になる！
奈津美、本当にごめん、本当に本当にごめん」

受話器に頭を下げる勢いであたしが謝罪をまくし立てると、
奈津美は受話器の向こうで、あっけらかんと笑った。

「いいよ、もう。こうして仲直り出来たし」

奈津美の明るく裏のない、いつもの声に救われて、
あたしはこぼれそうになっていた涙を、こらえる事が出来た。

ああ、そうなのだと思う。
あたしは奈津美が本当に大好きで、
実は誰にも取られたくなかったから、
彼氏なんてものが奈津美に出来るのが嫌だったのだ。
だから、お互いの了承が無ければ付き合わないなんて、
あたしは言い出したんだった。

でも、今あたしはようやく分かった。
親友というのは、彼氏なんかよりもずっと強い関係なのだ。
恐れることなんて、何にも無かった。

「で、さえ。今日の校門の彼は誰?」

自分の胸の中で、親友について一人で感動していると、
急に、奈津美に現実に引き戻されて、
あたしは口から心臓が出そうになった。

「彼氏なの?凄いかっこいい男の子だったけど」

奈津美の面白そうな声が、受話器から飛び出てくる。

「なわけないじゃん!」

そう、あんなに素敵な男の子が、

あたしの彼氏なんてものなはずがない。
誰がどう見たって分かる話だ。

「じゃ、誰なの？
仲良さそうに、あの後、
一緒に校門から去って行ったみたいだけど？」
奈津美の言葉に、
「何よ、どこかに走り去ったと思ったら、ずっと見てたわけ？」
あたしが声を裏返して言うと、
「当たり前じゃない。そりゃ、見届けるっつうの」
しらっと、楽しそうな声色で言われて、
あたしはまた言葉に詰まってしまった。

そして。

奈津美に促されるまま、
大志さんとの馴れ初めから全てを話す。

牛丼屋の下りまで終わると、
奈津美はため息をついた。
「なんて、ドラマティック」
「缶蹴りつけて、最後は鼻血出したのよ？
ドラマティックには、程遠いっつうの」

さっきの奈津美の口調を真似て言い返したけど、
本当は、あたしもちらりとそう思っていた。

牛丼ご馳走して、二人で食べただけで終わったら、
そんなことは思わないけど、
文化祭に誘われたんだもの！

受話器を握るあたしの顔が、
またにやりと、情けなくゆがんでしまう。

「そう言えば、私の彼もＹ高の三年で、
バンドやってるの。
文化祭でやっぱり、ビートルズ演奏するって言ってたのよ。
バンドのメンバーにはまだ会った事ないんだけど」
「ええっ！」
ふと奈津美が言った言葉に、あたしは受話器に叫んでしまう。

二人の通話に、それぞれの考えを巡らせる間の、
少しの沈黙が起こる。
その沈黙を破ったのは、奈津美だった。

「ねえ、もしかして、
私の彼と、さえの牛丼の彼とは、
同じバンドなのかもしれない。
だって、ビートルズのコピーバンドでしょ？

いくらY高の文化祭で、複数のバンドが演奏するからって、
所詮、高校の文化祭だよ？
違うバンドが演奏曲目で被らないんじゃないかなあ」

奈津美の言葉に、あたしの心が一気に宇宙まで飛びそうなくらい、
舞い上がる。

奈津美の彼と大志さんが、もしかして同じバンドを組んでる？
それって、なにかの運命？

なんて心の中で思っていても、
あたしは何とか理性で自分を抑える。

そういう偶然ってあるのかもしれないけど、
でも、それはきっとあたしのための偶然なんかじゃなくて、
本当にたまたまなだけなんだ。
そう思わなければ、あたしはどこまでも有頂天になりそうだから、
あたしは必死で、自分に言い聞かせていた。

「じゃあ、何にせよ、
一緒に、Y高の文化祭行けるね」
奈津美の言葉に、あたしは頷く。
「良かった、あたし一人で行かなきゃいけないとしたら、
夜も眠れなかったよ。本当に有難う」
もう何回目か知れないお礼をあたしが言うと、
奈津美はまた明るく笑った。

「私の夢ってなんだかわかる？」
奈津美は明るく言葉を続けた。
「何？」
全く思いつかなかったあたしは、聞き返す。
「さえとさえの彼氏と、私と私の彼氏とでダブルデートすること」
さらっと、凄い事を奈津美は言う。

あたしは苦笑した。
もし、そんな事がいつか起きるなら、
それは当然、奈津美だけの夢じゃない。
あたしの夢でもある。

「あたし、頑張るよ」
あたしが言うと、奈津美は言った。
「応援するよ、がんばってね」
携帯の切るを押した後も、
しばらく、あたしは受話器を胸に抱えていた。

奈津美とあたしは、お互いがどれだけお互いを好きなのか、
その通話で、再確認したのだろうと思う。
得がたい親友。

そして、この通話で、
あたしはもう一つ確認していたのだった。
それは、あたしがどれだけ、
大志さんに憧れているのか。

一体、この想いが叶うのか、
叶わないのか。

どちらなのかと言えば、
きっと、結果を予想して言うほど、
あたしの恋の行方は面白いものじゃないかもしれない。

でも、そんな事は今は考えず、
やれるところまでやってみよう。

奈津美の応援の言葉を聞いて、
あたしは結構前向きに思ったのだった。

3

文化祭までの数日、
仲直りした奈津美との学校生活は、毎日がうきうきとして、
地に足がつかないくらい、あたしは浮かれていた。

「いい？彼に今度会ったら、
　せめてメアドくらいは聞くのよ？」
奈津美が恋のワンポイントアドバイスを教えてくれるのを、
あたしは全て、いちいちメモを取ったりして生真面目に恋に取り組んでいた。

制服のスカートの裾、
校則がうるさいから、
その日限定で少し上げようとか、
髪の毛をアイロンで巻こうとか、
おしゃれのことも、たくさん奈津美と話し合った。

奈津美はカラーリングしているわけでもないのに、
栗毛色の綺麗な髪をしている。
まるで白人の血が入っているかのような白い肌、
大きい二重の目が魅力的で、誰から見ても美人だ。
Y高の彼氏が、遠くから奈津美を見初めたのも、
理解が出来る。

反面、あたしは一重の目で、

色は地黒だし、体の凹凸もはっきりしていない。
髪の毛も肩までの普通のストレートだし、
一言で言えば、地味。
だから、こんなあたしのどこがよくて、
大志さんはあたしを文化祭に誘ったのか、不思議だった。

ストレートに奈津美にこの気持ちをぶつけて見ると、
「あら、人の好みってそれぞれなものよ。私が男だったら、
　さえは結構タイプだもの」
なんて優しい言葉を言ってくれて、
あたしはまたまた有頂天になってしまった。

親友の欲目で、そういう風に奈津美は言ってくれたのだろうに、
舞い上がっていたその時のあたしは、
きっと、どんなにうそ臭い社交辞令のほめ言葉でも、
妙に素直に受け入れてしまっていただろう。
いつも慎重なあたしが、そんな風にアホ全開になったのは、
初めての事だった。

そして、あたしは文化祭の当日、
しみじみ、その自分のアホさ加減に気がつくことになる。

文化祭当日、土曜日。

いつもよりも、少しスカートの丈を短くした制服姿で、
あたしと奈津美は隣町のＹ高の校門の前にいた。
髪はアイロンで巻いてみた。
そして、薄くお化粧も。
いつもよりはずっと自分的にはイケテるつもりだったけれど、
あたしは校門の前で、もうすでに気後れしていた。

思った以上に、Ｙ高の文化祭は盛り上がっていて、
その飾りつけやら、来場する他校の生徒数やら、
全てが、あたし達の女子校の文化祭のレベルとは、
まるきり違っていた。

「あのお嬢さん学校のＦ女の制服もいるよ！」
あたしが目をまん丸にして奈津美に言うと、
「共学の高校の制服着てる女子もかなり多いね。
ここの男子校って、進学校でエリート学校だから、
やっぱり人気あるんだね」
奈津美の言葉に、あたしはますます怖気づいてしまった。

大志さんは、
あんなにカッコいいだけじゃなくて、
進学校のエリートなのか。

正直、あたしの通っているM女は三流だ。
卒業したら何になりたいと聞かれて、
「お嫁さん」ってな答えが多いような学校。
進学校とは程遠い。

「何、血の気引いているのよ！」
すっかり気後れして、
そのままくるりと方向転換して帰りたくなっているあたしの肩を、
奈津美が笑って強くはたいた。
「さえ、例のタオルちゃんと持ってきたよね？」
あたしの顔を覗き込むようにして、奈津美が言う。
「う、うん」
手に持っている小さい紙袋を見下ろして、
あたしは頷く。
鼻血を拭くのに貰ってしまった大志さんのタオルの代わりに、
新品のタオルを買ってきていたのだ。

貰ってしまったハンドタオルよりは、
少し大きいスポーツタオル。
唯一、人に言える特技が手芸というあたしは、
そのタオルに大志さんのイニシャルを刺繍をしたのだった。
白地のタオルに緑色の糸のT・Kのイニシャル。
自分ながら、上手に出来たと思う。
そして、綺麗にラッピングして、小さいリボンもつけてあった。
「それ、渡すんでしょう？」
あたしの目を見て、奈津美が力強く言う。
「うん」
あたしも強く頷いて、奈津美と一緒にY高の校門をくぐったのだった。

奈津美の背中に隠れるようにして、
色々な制服の生徒たちでごったがえしている校内を、
あたしは奈津美について歩いていた。

奈津美の足取りはしっかりとして自信に満ちている。
そりゃそうだ。
三ヶ月も付き合っている彼氏がいる学校なんだから。

そして、素直に、
そんな風に、Y高の中を歩ける奈津美が羨ましいと思った。

「確か、和明のいる三年B組はホストクラブやるって言ってたんだ」
校舎の中に入って、色々な催しをやっている教室を眺めつつ、
やはり生徒でごったがえしている廊下を歩き進める奈津美が呟くように言う。
ふーん、と気もそぞろに相槌を打とうとして、
あたしは驚いた。
「ホ、ホストクラブ？」
「っても、当たり前だけど、お酒はなしのね。なんていうの、
ホスト喫茶？ってやつ？イケメンの男の子達と一緒にお茶出来るんだって」
にこりと笑って言う奈津美に、あたしは畳み掛けるように言う。
「もしかして、奈津美の彼氏の和明さん、
ホスト役やっているってこと？」
「ってことよね。クラスのイベントだからしょうがないけど、
でも、もし他の女の子と必要以上にデレデレしてたら、
ぶっとばす」

奈津美がグーを顔の前で握り締めて言うのに、
あたしは小さく微笑んだ。
そんな彼女的な仕草も、いいなぁと素直に羨ましいのだ。

奈津美と電話で仲直りしたあの日、
大志さんの馴れ初めを話した後、
あれから直ぐに、奈津美は彼氏に問い合わせてくれて、
大志さんと奈津美の彼氏の和明さんは、同じクラスメートで、
同じバンドを組んでいると判明していた。

ということは、
大志さんもホスト役をしているということなんだろうか。

間違いなくもててるんだろうなと、
大志さんの周りに、今時の可愛い女子が群がる光景を想像して、
あたしは、気が重くなった。
想像しているだけでも、タオルを渡す気力がくじけそうだ。

「ここが三年A組か。ということは、あそこがB組ね」
奈津美は確認しながら、どんどん先に歩いていく。
通りかかった「占いの館」と飾り付けられているクラスには、
確かに三年A組とあった。

そして、A組の先の廊下は、
それこそ、見たこともないくらいの数の、
様々なバリエーションの制服の女子生徒がたむろしていて、
あたしはぎょっとして立ち止まってしまった。

何があるのかなんて聞くまでもない。
非常にわかりやすい。
三年B組のホスト喫茶が、とんでもなく盛況ということなのだ。

「Ｎｏ　ｗｈｅｒｅ　ｍａｎってビートルズのコピーバンドやってる人たち、
　ここでホストやってるって、本当？」
あたしと奈津美を追い越して、B組に小走りに向かう他校の女子達が話している。

「奈津美、彼氏と大志さんの組んでるバンドの名前って…？」
あたしがますます気後れしながら聞くと、頷いて言った。
「そう、Ｎｏ　ｗｈｅｒｅ　ｍａｎって名前よ。
　知り合いのライブハウスでライブやってたりするから、
　知っている人は結構知ってるみたいよ」
あっけらかんと言って、奈津美は歩く速度を速めさえして、
B組に突っ込んでいく。

大志さんにもうすぐ会えるというときめきと、
もしかしたら、会わない方がいいんじゃないかという、
消極的な自衛の衝動とがあたしの中で湧き上がって戦っていた。

牛丼屋で見上げた、あの背の高く完璧な美形の大志さんを思い出す。

そりゃ、憧れる女子が多くて当たり前だろう。

「さえ！ぼっとしない！置いてくよ？」

大分前に進んで立ち止まり、あたしを振り返っている奈津美が、
腰に手を当てて強い口調で言う。

奈津美が強気になれるのは、
B組に彼氏がいるからだ。
彼氏に愛されている彼女だという根拠が、
B組に群がる女子なんか蹴散らしてしまうのだろう。

あたしは手に持っているタオルの紙袋を見て、
大志さんにこれだけ渡せれば、もうそれ以上は望むまいと、
いつぞやの前向きな気持ちもみるみるしぼんで、
俯きながら、奈津美の後をついて行ったのだった。

4

教室の入り口から、奈津美が中を覗いている。
その背中越しに中を見ると、
学ランではなくスーツを着た男子がいるのが見えて、
どうやらホスト役をしているのだろうというのが見て取れた。

並べ替えられた机には綺麗な布がかけられて、
小さな花瓶に花が生けられ、一見喫茶店風に飾り付けられている。
その席でスーツ姿の男子と、よその学校の制服を着ている女子が、
一緒に座りながら、楽しそうにお茶を飲みながら話をしていた。

「いらっしゃいませ、ご指名は？」
教室の入り口で、これまたスーツを着た男子が奈津美に声をかけてくる。
奈津美はその男子ににっこりと笑うと、
「広瀬和明で」
なんと彼氏を呼び捨てで指名をした。
声をかけた男の子は、少し首を傾げて奈津美を見た後、
でも、理由がわかったという風に笑顔になると大きい声で、
「和明！」
教室の中に声をかけた。

すると、奈津美に押しのけられて廊下にいる他校の女子達から、
小さいざわめきが起こる。
「後から割り込んで来たくせに」
「何で和明君を呼び捨てにしてるのよ」
「なんか、むかつく」

小さいけど、はっきりとした不平不満が聞こえてくる。
けれど、奈津美はそんなのは物ともしなかった。

教室の中を見回していると、
一人のスーツ姿の男の子が立ち上がった。
丁度接客していた他校の制服を着ていた女子に、
小さく頭を下げているのが見える。
そして、こちらに歩いてくるのが見えた。

あれが奈津美の彼氏なんだろうか。

あたしはまるで自分の彼氏が歩いてくるかのように、
ドキドキして、和明と呼ばれた男の子がやって来るのを見ていた。

そして、奈津美に向かって近づいてくる男の子を見て、
思わず短く叫んでしまう。

「うわっ、か、かっこいい！」

奈津美はあたしの言葉に、照れて小さく笑った。

少し茶色の髪をしているのは、
きっと進学校だからあまり風紀にうるさくないせいだろうか。
短髪なんだけれど、わざと不揃いにカットしてある長めの前髪、
少し気の強そうな強い視線、だけど整った顔のその口元は、
奈津美を見て微笑んでいた。

近づいて来ると、かなりの長身なのが分かる。
大志さんと同じくらいの身長だ。

そして、ホスト役のコスチュームの黒いスーツが、
とても似合っていた。
本当にこんなに美形なホストがいたら、
実際、どこの店でもナンバーワンになれるんじゃないだろうか。

「いらっしゃいませ」
おどけた口調で奈津美の彼氏の和明君は、
あたしと奈津美にお辞儀をした。

「奈津美の言ってた友達？」
和明君は奈津美を見た後、あたし見て言った。
「そう」
奈津美は頷くと、教室の中を見回しながら、
さり気なく和明君のスーツの袖をつかむ。

おー、彼女の仕草だ。

あたしは感心したように、
奈津美のその仕草を見ていた。

しかし、しみじみ思う。
色白でまるでハーフみたいに可愛い奈津美と、
超イケメンの和明君は、本当にお似合いだ。

悪いけど、今この教室の中と外で、

奈津美たちの様子を見てじりじりしている他のどの女子も、
奈津美には敵いやしなかった。

「大志君いるよね？」
奈津美の言葉に、あたしの心臓がどきっと音を立てる。
「うん、いるよ。ってあれ？今さっきそこにいたんだけど。
トイレにでも行ったのかな」
和明君の言葉に、あたしの心臓はどきどきを超えて、
体の中で跳ね始めた。

「しかし、君ら面白い出会い方したんだな。
大志に話聞いて、びっくりしたよ」
和明君はくすりと笑いながら、あたしに言う。
「大志に公園で蹴飛ばした空き缶ぶつけて、逃げたんだって？
その時に、君が落として行った財布を大志が学校に届けたら、
道路に突き倒されて転んだとか。
それで君が「このままでは別れられない！」とか叫んだせいで、
別れ話をしているカップルと間違えられて、野次馬に囲まれて、
その時、君、鼻血まで出しちゃったんだってね。もうなんだか最高」
面白そうな口調で和明君は言う。

和明君の楽しそうな口調の反面、
あたしの顔からは、すっと血の気が引いた。

こうして改めて、あたしが彼にした事の経緯を他の人から聞いてみると、

あたしってどんだけ酷い「すっとこどっこい」だったのかが、良くわかる。

奈津美に励まされたからって、
彼との事を頑張ろうなんて思ったことすら、
なんてずうずうしい事だったろうか。

背後の廊下にいる女子達が、何かぶつぶつ言うのが聞こえた。
「まさか、大志君の？」
あたしを、大志さんの彼女だと心配しているのだろうか。
有り得ないのに。

なんだか、あたしは申し訳ない気持ちで一杯になって、
背中越しに聞こえた声に、首を左右に小さく振って見せた。
「あの、ただあたしご迷惑をかけたお詫びに来ただけですので。
今日も、鼻血拭いたタオルを頂いた代わりに、
新しいタオルお届けに来ただけなので、
これをもし良かったら使ってくださいと、
大志さんに渡して頂ければ、あたしはそれでもう充分なので」
段々尻すぼみになっていく声で言うと、
あたしは、持っていた紙袋を和明君の手に押し付ける。
「ちょっと、さえ？」
和明君の側にいた奈津美が、驚いたように言った。

「ごめん、奈津美。やっぱりあたし帰る。
でも、奈津美は和明君っていう彼氏がいるんだから、

ゆっくりしていきなよ」
あたしは「和明君っていう彼氏」という言葉を、
一際大きい声で辺りにも聞こえるように言う。
廊下の女子達の顔色が変わって、いい気味だった。

そう、大志さんはあたしの彼氏じゃないけど、
和明君は完璧、奈津美の彼氏なんだから。

「奈津美、また学校でね！今日は有難う。
和明君、あたし先に帰るので、
この後、奈津美をよろしくお願いします。」
あたしはペコリと頭を下げると、廊下を歩き出した。
校舎の出口くらいは、方向音痴のあたしでも分かる。

「もう！さえ？さえってば！」
奈津美の声が追ってくるけど、あたしは振り向かなかった。

勝手に浮かれていた自分の馬鹿さ加減が情けなくて、
涙が出そうだったからだった。

5

ずんずん廊下を歩いていく。
奈津美にあまり心配をかけたくないから、
駆け出したいのをこらえて、でもかなりの早足で。

「さえちゃん！」

きっと、大志さんは、
面白おかしく、和明君にあたしとの出会いを話したんだろう。

「待てよ！さえちゃんって！」

そりゃ、ちょっと他に聞かないくらいの「すっとこどっこい」さは、
自分でも認める。
あたしが男の子だったら、あたしみたいな女の子は嫌いだ。
ただでさえ、顔だってスタイルだって並なのに。

「さえちゃん！」

ふと、誰かに自分の名前を呼ばれた気がして、
あたしは立ち止まった。
そして、辺りを見回す。

相変らず他校生でごったがえしているＹ校の中だ。
知っている人なんて、いるはずもない。
気のせいなのだろう。

また歩き出したら、不意に後ろから制服の腕を捕まれた。
あたしは驚いて振り返る。

「今、和明に聞いて」

黒に近い濃い紫のスーツ姿の男子が、
あたしの腕を掴んで、少し息を切らして立っていた。
肩くらいまでの黒い髪を後ろでひとつに縛っている、
顔立ちも端正で、綺麗な男の子。
あたしはぼーっと、その長身を見上げてしまう。

「さえちゃんが帰ったっていうから、びっくりして」
あたしは首を傾げて、まだその綺麗な男の子に見入っていた。

何で、あたしの名前知ってるんだろう。
心の中で呟きながら、目の前の彼をどこかで見たような気がして、
あたしは、首を傾げた。

「なんで帰るの？来たばっかでしょ」

それでもあたしが黙っていると、
彼は自分があたしの腕をまだ掴んでいるのに気がついて、
小さくゴメンと言って離した。

あたしは彼の顔をじっと見る。
切れ長の二重の目。
日本人離れしたすっと通った鼻筋、
広くて形のいい唇。
あれ？
このかっこいい唇にご飯粒がついたのを、
見たことがあるような。

「上月大志…さん？」
あたしが独り言のように呟くと、
大志さんは、にこりと笑った。
「うん、いらっしゃい」

人って、どうして着ているもので、
こんなに印象って違うんだろうか。

学ランのイメージしかなかったから、
目の前の完璧売れっ子ホスト姿の彼が、
上月大志さんだと、あたしは分からなかったのだ。
それに、今日は肩までの髪も後ろでしばっていたから、
余計にイメージが違ったせいもある。

それにしても、なんてカッコいいんだろう。

学ランもカッコ良かったけれど、
スーツ姿はもう神々しいくらいだった。

「この間、牛丼ご馳走になったから、
今度は俺がお茶奢るよ。
クラスで喫茶店もどきの模擬店やっててさ、
大した飲み物置いてないけど、良かったら」

ぼーっと見とれて呆けているあたしに、
大志さんは苦笑する。
「ねえ、聞こえてる？」

あたしはそこでようやくはっと我に帰ると、
恥ずかしさで赤面した。

「ご、ごめんなさい。き、聞こえてます！」
慌てて答えて、ぺこりと頭を下げる。

大志さんはあたしがおたおたしている姿に、
小さく笑いながら、
「戻ろう、和明達待ってるし」
言って、来た廊下を戻り始めた。

もしかして、追いかけて来てくれた？
和明君に、あたしが帰ったって聞いて？

そんな事を思ったら、

落ち込んでいたあたしの心は、
現金にも一瞬にしてばら色に変わってしまった。

そして、急いで大志さんの後を追う。

「あ、そうだ。あのさ」
ふと大志さんはあたしを振り返って立ち止まると、
思い出したように言った。

小走りになって追いつこうとしていたあたしは、
急ブレーキが効かなくて、大志さんの体にぶつかりそうになる。

「！！！」

ほんの瞬間の判断だったけれど、
でもあの鼻血を出した時のように、
もう二度と、あたしは大志さんを巻き込んで転びたくはなかったから、
体中の全瞬発力を動員して、とっさに大志さんの体をよけた。
あたしだけが一人ぶざまに転ぶのなら、なんてことはないのだから。

バランスを崩したあたしの体が倒れ始め、
グッと廊下が自分の顔に近づいてくる。
あたしはぎゅっと目をつぶった。

「おっと」
次の瞬間、制服のウエストの辺りに凄い力がかかって、

廊下に激突するはずのあたしの体がふわりと浮く。

気がつくと、なんと！あたしは大志さんの片腕に抱えられていた。
大志さんが、転びかけたあたしを、
腕を伸ばして、抱きとめてくれたのだ。

顔のすぐ側に、大志さんの濃い紫のスーツの胸がある。
ワインレッドのネクタイが、あたしのせいで少し乱れていた。
ほのかに良い匂いがする。
整髪剤？コロン？

「今度は俺の背中で打って鼻血出すの嫌だから、俺をよけたの？」
面白そうな口調が、頭の上から降ってくる。
あたしは顔を上げた。
ほんのすぐ近くで、声と同じように面白そうに見下ろしている大志さんの視線と、
あたしの目が合う。

ドキリと胸はときめいたけれど、
それよりも、からかわれている口調に、
傷ついた痛みの方がちくりと鋭かった。

やっぱり、大志さんは、
あたしの事を変な奴だと思っているんだろうなと、

たったさっき、バラ色になったあたしの心は、
みるみるしぼんだ。

「本当にいつも、ご迷惑ばかりおかけして」
しょんぼりと言いながら、あたしは大志さんの腕から抜け出た。

情けなくて、消え入りたくなる。
大志さんの前では、あたしはいつもドジばかりだ。

ふと、辺りを見回すと、
遠巻きにたくさんの女子が集まっているのが分かった。
理由は大体、分かる。
大志さんのファンが、三年B組のホスト喫茶から、
彼の後を追ってきたのだろう。
見るからに、彼女達はブーイングをあたしに投げつけていた。

「あの、和明君に新しいタオルお渡ししてあります。
私が例の鼻血で汚してしまったハンドタオルの代わりなんですけれど、
もし、良かったら使って下さい」
あたしはしょげたまま、深々と頭を下げて大志さんに言った。

「やっぱり、あたしはこれで失礼します」
くるりと踵を返して、あたしはまた校舎の出口に向かう。

「え?待ってよ」

大志さんの声が背中越しに聞こえる。
それでも、あたしは聞こえない振りをして、
歩くのをやめなかった。
「さえ！」

ざわりと辺りが静かにどよめいた。
そのどよめきの一部に、あたし自身の声もあった。
言葉にならない疑問形の声。

え？今、さえって言った？

あたしは戸惑って、
でも立ち止まると、
ゆっくり大志さんを振り返った。

呆然としているあたしに、
大志さんは照れたように、
頭を掻きながら近寄ってきて言う。

「ほんと、ごめん。あんたって本当に真面目っていうか、
素っていうか。俺、こんなふざけた野郎だから、
気にさわったんだったら、謝るから。
帰るなんて、言わないでよ」
彼の言葉に、あたしは呆然としたまま頷く。

「それと、さっき言おうとしたんだけど、
俺、誰かを呼ぶときに「ちゃん」とか、
付けるの照れくさくて嫌なんだ。
俺のこと呼ぶ時も大志って呼び捨てでいいから、
俺もあんたのこと、
さえって呼んでもいい？
俺、友達はみんな呼び捨てだからさ」

友達。

「あ……はい」
あたしがなんとか、口から言葉を押し出して返事をすると、
大志さんは、またあの誰をも魅了する満面の笑顔になった。

呼び捨てし合う、友達。

あたしは今まで、男の子の友達なんていなかった。
高校は女子高だし、小学、中学の頃だって、
男の子のクラスメートなんてものはいたけど、
友達なんてものはいなかった。
それも名前を呼び捨てされるような。

だから。

考えようによっては、
嬉しいかもしれないと思った。

大志さんのように素敵な男子が、
あたしの友達になってくれるなんて。

だけど、その思いの陰で、
やっぱりと、呟く自分の心を感じない振りをする。
分かっていた事だ。
あたしは自分に言い聞かせる。

だって、己を良く振り返ってみろってんだ。
こんなすっとこどっこいのあたしでも、
大志さんは、嫌いにならずにいてくれて、
友達になってくれるって言うんだから、
それだけで十分じゃないか。

あたしは気を取り直して、小さく笑った。
苦笑いになっていないことを祈りながら。
そして、大志さんの歩き出した後をついて歩き始める。

友達で、十分。

そう、それで十分。

ふと、あたしを見つめる強い視線に気がついて、
また足を止めた。

茶色い髪を綺麗にカールさせて、
肩の下までたらしている。
小さな顔に大きな瞳、小さい唇にはピンクのグロス。
最近流行の韓流のアイドルみたいに可愛い女子だった。
着ている上品なデザインのブレザーは、
この辺りでは有名なお嬢様学校、F女の制服。

その子が、あたしの事を物凄い勢いで睨んでいたのだ。

いや、他の子たちの視線も痛かったのだけれど、
普通の大志さんのファンの子達の、
嫉妬の視線とはまるきりレベルが違う。
その子からの視線は、
まるで槍か剣のようにあたしを突き刺した。
正直、怖いと思うくらい。

あたし、何かしただろうか。

でも、あたしはあの子のことを知らないよな。

不安な気持ちになりながら、
でも、あたしはその子から目が離せず、
そのままそこに立ち尽くしていた。

その間、大志さんはかなり前へと歩いてしまっていたけれど、
あたしはまるで、蛇ににらまれたカエルのように、
動けなかった。

ふいに、そのF女の制服の子はあたしから顔を背けると、
廊下を小走りに走り出す。
あたしはほっとして、その背中を見送った。

その子が走っていく方向の先で、
大志さんがあたしを振り返って、
ついて来ないあたしに、不思議そうな顔をしている。

あたしは急いで追いつこうと、
大志さんに向かって歩き出した時、
なんと、そのF女の子は大志さんに抱きつくような感じで駆け寄った。
そして、大志さんの濃い紫のスーツの腕に自分の腕を絡ませる。

大志さんは驚いた表情をして、
離れた場所にいるあたしから、
自分にしがみついているそのF女の子に視線を落とすと、

「ちはる！なんだよ、びっくりさせんなよ！」
声を上げた。

あたしはまた足を止める。

ちはる？

「だって、大志、全く私のことに気がつかないんだもん」
甘える口調で、そのちはると呼ばれた子が大志さんを見上げて言っている。
そして、ちらりとあたしを見た。
まるで、わざとあたしに見せ付けているかのようだ。

彼女、なのかな。

友達で十分と、気を取り直したばかりのくせに、
またあたしの気持ちは沈んでいく。

あたし、ここにいたら、
悪いんじゃないかな。
なんて、別にいじけているわけじゃなかったけれど、
凄く気が引けたし、やっぱり気持ちは下降路線。
だって、あたしは出来たてほやほやの大志さんの「友達」だから。

だけど、またこのまま帰ったりしたら、
大志さんとは、本当に気まずくなってしまうだろう。
それだけは避けたかった。

大志さんは、奈津美の彼氏のバンド仲間でもある。
やっと仲直りした奈津美と、もうギクシャクしたくない。

それに、あたしは「友達」なのだから、
大志さんに彼女がいたって、
平気な素振りが出来なきゃ。

これから先、「友達」として大志さんにたまに会えるなら、
それだけで、いいんだ。

あたしは小さく息を吐いて顔を上げると、
大志さんに向かって大きく歩き出した。

「お前、うざいってば」
大志さんは凄く親しい感じで、
そのちはるって子に文句を言いながら、
組まれた腕を解こうとしている。
でもあたしが近づいて行っても、
頑として、ちはるって子は大志さんの腕を離さなかった。

「あの、先に奈津美のところに戻ってます」
あたしは大志さんの近くに行くと小さく頭を下げて言った。
ちはるという子にも、小さく会釈をする。

そして、そのまま脇を通り過ぎて、あたしは奈津美の元へと急いだ。

頑張ったと思う。
やれば、あたしは出来る子だと思う。
なんとなく、泣きそうになったのは、
気のせい。

「さえ！」
ふと、あたしの名前を呼ぶ声がする。
振り向くと、大志さんがあたしを見ていた。

「紹介するから、こいつ、狭山ちはる。
幼稚園からの俺の幼馴染なんだ。
妹みたいなもんで」

少し早口に大志さんは言うと、
後の言葉を続けず、あたしをじっと見た。

見るからに、ちはると呼ばれた子は、
むくれた。
大志さんに妹みたいなものと言われただからだろうか。

だけどほんの少し、
あたしの心はほっとしていた。

その彼女は、大志さんにとって妹みたいなものなのか。

それじゃ、あたしと彼女は大志さんの、
「妹」と「友達」
ってわけで。

でも、考えたら結局、
近くにいるという意味では、
「友達」は「妹」になんて、勝てやしない。

「私は、大志の妹なんかじゃないから！」
大志さんの腕にしがみついたまま、ちはるが叫ぶように言う。
学年はきっと、大志さんと同じ年のあたしよりも下だろう。
高校一年生か、二年生か。

あたしはふっと、ちはるに笑って見せた。
「あたしは、大志さんの単なる友達ですから」
ご心配なく、というニュアンスを込める。
彼女は鼻白んで、あたしを睨んだだけだった。
大志さんは、何か言いたそうだったけれど、
あたしは気にしない素振りをした。

あたしはその後、
急ぎ足で、奈津美の元へと戻って行った。

6

「さえ！」
戻ってきたあたしの顔を見ると、
奈津美は心底ほっとした表情をした。
「あれ？大志君は？」
けれど、一人で戻ってきたあたしの後ろを眺めて言う。
「なんか、幼馴染の可愛い彼女と話してたから、
　置いてきちゃった」
あたしは小さく肩をすくめる。
「幼馴染？」
奈津美は眉をひそめた。

和明君に導かれ、
三人で、ホスト喫茶のテーブルについて、
コーラを飲む。
指名料は奈津美の彼女のよしみで、ラッキーにもタダだった。

「さっき言ってた大志の幼馴染って、
　ちはるだろう？」
和明君が言う。
「大志の妹みたいなもんだよ」
安心しなよって感じで、和明君があたしを見て言う。
それを聞いて、奈津美も笑顔になってあたしを見た。

「別に、あたしには…関係ないし」
あたしが小さく笑って言うと、

奈津美はかすかに眉をしかめた。

「大志さんに言われたの。
友達はみんな名前呼び捨てしてるから、
あたしのことも、さえって呼び捨てにしていいかって」
あたしは何とか笑顔になれて、自分でほっとした。
「友達？」
奈津美は憮然として言う。
そうよ、あたしなんて恋愛対象にならないからって、
牽制されたんだからと思いつつも、
あたしは、奈津美には「あはは」と明るく笑って見せた。
「友達で十分だよ。
あんなにカッコイイ男の子が友達だなんて、
自慢できるよ」
奈津美が唇を尖らせているのを、あたしは見ない振りをする。

そんなにこの世の中、
あたしみたいな平凡な女子の回りに、
かっこいい男の子との恋なんて、落ちてなんかいないって。

丁度、その時、
大志さんが戻ってきて、あたしたちの座っているテーブルに来ると、
その辺にあった空いている椅子を引っ張り、どかりと座った。
「ごめん、遅くなって。飲み物は俺が全部おごるから」
急いで来たのか、少し息を切らしている。

和明君が口を開いた。
「ちはるが来てたんだって？」
大志さんは和明君を見て、
やれやれという仕草をする。
「文化祭の打ち上げに連れて行けってうるさかったから、
連れて行くのを条件に、やっと開放して貰った。
あ、そうそう、明日の夜、文化祭の実行委員の打ち上げやるんだけど、
良かったら、あんたらも来ない？多いほうが楽しいし。
俺ら、今年実行委員もやってんの。忙しい、忙しい」
おどけたように言う大志さんに、
「うん、うん、行く行く！」
奈津美は即答して、嬉しそうに広瀬君を見た。

あたしは返事をせずに、黙って微笑むだけにしといた。
奈津美は和明君と一緒だろうし、
さっきのあの幼馴染のちはるって子も来るっていう。
正直、淡い失恋の痛手もあったし、
こんな心理状態で、知らない人たちの中にぽつんと一人でいて、
大志さんとあの子の姿をまた見るのは、
かなりしんどい。

あたしは和明君の座っている椅子の背にかけてある、
紙袋に気がついた。
あたしが和明君にさっき預けたタオルの入った袋だ。
和明君に小さく頭を下げて、
あたしは椅子から立ち上がってそれを手に取り、
大志くんに差し出した。

「あの、鼻血拭いたタオルすみませんでした。
新しいの買ってきたので、
良かったら、使ってください」
そして、もう一度ぺこりと頭を下げる。

「見ていい？」
嬉しそうな表情になって、大志さんはあたしを見る。
あたしは頷いた。

白地のスポーツタオルが袋から出てくる。
緑色の糸で大きめの大志さんのイニシャルの刺繍は、
すぐ目に付いた。
結構、あたしの自信作だったりする。

「このイニシャル…？」
不思議そうに大志さんが言うのに、奈津美が口を開いた。
「さえの刺繍なんです。彼女、手芸得意だから」
大志さんは目を見開いて、もう一度刺繍をじっくり見る。
「すげー綺麗。プロなみじゃん。さえって器用なんだ」
さりげない呼び捨てに、あたしの胸がドキリと音を立てる。
「有難う、大事に使うよ」
そして、大志さんは満面の笑顔になった。

あたしの胸が痛む。

なんて、綺麗な笑顔なんだろうと思う。
告白する前から振られてしまったっていうのに、

憧れる気持ちが止められない。
あたしは何とか、
大志さんから目をそらすと、ぺこりと小さく頭を下げた。

ふと、教室の入り口で誰かが叫ぶ。
「大志！和明！演奏準備！」

「おっと」
大志さんが席から立ち上がる。
和明君も立ち上がった。

「この後、体育館でバンド演奏やるから、
是非見に来てよ！じゃあまた、後で」
大志さんは言うと紙袋を持って、和明君と教室を出て行った。

廊下では黄色い声が上がっている。
二人のファンの子たちなんだろう。

「さえ？見ている感じでは、雰囲気悪くないけど？」
二人が教室から出て行ってしまった後、
奈津美がにやりとして言う。
「悪くないけど、別に良くもないよ」
あたしは肩をすくめて、ため息混じりに言った。

「お前が女子を自分から誘うなんて、今まで一度も無かったから、
どんな子が来るのかと思ってたけど、案外地味なタイプの子だな」
廊下を体育館へと急ぎながら、広瀬和明が上月大志に言っている。

「地味なんかじゃないよ。面白い子なんだ」
大志の言葉に、和明は意外そうな顔をする。
「一番最初に会った時なんてさ、蹴飛ばした缶をぶつけられたから、
俺、切れて振り返ったんだけど、蹴飛ばしたあいつの方がもっと
切れててさ。
真っ赤な顔して、顔を涙でびしょ濡れにして、俺のこと睨んでて
さ。
女の子のあんな表情って見た事無かったから、強烈だったよ。
次の日、拾った財布届けたら、前の日とがらっと違って、
もうこっちが気の毒になるくらい恐縮してさ、
鼻血と涙流しながら、ずっと謝ってるんだ」

思い出し笑いをしつつ、言っている親友の大志の顔に、
和明は今まで見たことのない表情を見ていた。
「その後、お礼にって牛丼奢って貰った時、あいつ食べないからさ、
食べかけのをくれって言ったら、もう見事に耳まで真っ赤になっ
ててさ。
なんか、いちいち表情が面白いんだよな。
あんな女子、今まで回りにいなかったから、超うけるんだよ」

和明はもしかして、と思いながら小さく笑った。
「確かに、お前の周りには、

可愛い子は多いけど、
お前の気を引こうと気合入ったメイクした、
香水プンプンの女子しかいないもんな。
ああいう子って新鮮なんだろう？
で、早速、さえちゃんに、名前呼び捨ての許可得たって？」
「ったく、情報はえーな」
和明の言葉に、大志は照れて顔を背けた。
「今日のラブソングはさえちゃんに向けて歌うのかな？」
からかった口調で続ける和明をどついて、大志は体育館へと急いだ。

「あっ！」
奈津美が声を上げる。

コーラを飲み終わったあたしと奈津美は、
三年Ｂ組から出て、体育館へと向かっていた。

「何？」
あたしが聞くと、奈津美はあたしの手をつかむ。
「さえ、大志君のアドレスとか聞いてないよね？」
「うん」
「うん、じゃないわよ。聞かなきゃ駄目じゃん」
「うーん」
あたしは首を傾げる。
「聞かなくてもいいかなぁ」
あたしが言うと、
奈津美は目を見開いた。
「でも、明日の打ち上げには行くんでしょう？」

「うーん」
「うーんって、何よ！行くんでしょう？」

大志さんに、
ちはると呼ばれていた子の顔が脳裏に浮かぶ。
「……行かないかも」
あたしがぼそりと言うと、
奈津美は何か言おうとして大きく息を吸い込んだ。
だけど、あたしの表情を見てそのまま息を吐いた。
「ま、いいや。大志さんの歌聞けば、
さえの気も変わるかもしれないし。
和明言ってたけど、大志さん、超歌上手いんだって！」

大志さんの歌！
凄く、聞きたい。

そして、本当は少しでも長く、
大志さんの側にいたいし、話をしていたい。
あの綺麗な顔をずっとずっと見ていたい。

奈津美には言わなかったけれど、
それがあたしの本心だった。

だけど、側にいればいるほど、
段々辛くなっていくのが分かっているから、
あたしは彼の側に行くのに、気乗りがしないのだった。

何故なら、
あたしは、決して、
大志さんの恋人にはなれないからだ。

「友達」って言葉は、
時として、すごく残酷な言葉になりえるのだと、
あたしは初めて知ったのだった。

7

あたしと奈津美がＹ校の体育館に行くと、
他の人達の演奏が始まっているのか、賑やかな音楽が聞こえてきた。
もうすでに中は人で一杯で、様々な学校の制服が入り乱れている。
男子校だってのに、その過半数は女子で、
舞台の上で演奏をしているバンドに黄色い声援を送っていた。

大志さんと和明君のバンドの演奏は、
もうすぐなのだろうか。
なんて事を思ったのは、
ホスト喫茶をやっていた三年Ｂ組の廊下にたむろしていた、
他校の女子の面々が体育館の舞台の前に、
陣取り始めていたからだ。

「えと、プログラムによると、
和明と大志君のバンドは次の次。
曲目は「ｃｏｍｅ　ｔｏｇｅｔｈｅｒ」「Ｉ　ｗａｎｔ　ｔｏ　ｈｏｌｄ　ｙｏｕｒ　ｈａｎｄ」「ｌｅｔ　ｉｔ　ｂｅ」かぁ。
私、一曲目ってかっこよくて好きだな。さえは？」
奈津美の言葉に、あたしは首を傾げる。
ビートルズは母親が好きで良く聞いていたけど、
そして、曲も聞けば皆有名だから、知ってるんだろうけど、
あまり詳しくはない。
「良く知ってるのは、最後の曲かなあ」
あたしが言うと、奈津美もうんうんと頷く。
「ｌｅｔ　ｉｔ　ｂｅか。凄く、いい曲だよね！あー楽しみ」
わくわくした声で言う奈津美に、あたしもつられて笑った。

「大志さんたち、バンドって何人で組んでるの？」
あたしの質問に、奈津美が答える。
「三人だよ。和明がベースで、大志さんがギター、そしてもう一人、夏越君って言う隣のクラスの男の子がドラムなの。そう言えば、私たちまだ夏越君には会ってなかったね」

奈津美と雑談している内に、より黄色い歓声が上がって、あたしは舞台の上に目をやった。

「あ、次だ」
奈津美が呟く。

裏方の人達が、バタバタと舞台のセットを変えた。

アナウンスが、大志さんたちのバンドの名前を呼ぶ。
「次の演奏は、ｎｏ　ｗｈｅｒｅ　ｍａｎです」

舞台の前を陣取っている女子たちから、一際高い歓声が上がった。

さっきのスーツ姿とは打って変わって、
ラフなＴシャツにジーンズ姿で、和明君、大志さん、
そしてもう一人の男の子が、舞台の上に現れる。

もしかしたら、このジーンズ姿が、
普段の大志さんの姿に一番近いのだろうか。

すらりと背の高い大志さんに、ジーンズはよく似合っていた。
肩までの長めの髪は、今はしばっていなかった。

奈津美の彼氏の和明君も、
茶色い髪の前髪を逆立てたヘアースタイルがとってもかっこいい。

けれど、ドラムに座った夏越君だろうと思われる男の子は、
二人に比べて少し背も低いし、メガネをかけていたし、
遠目だけれど、スタイルも顔だちも普通の男の子のようだった。

そりゃそうだ。
大志さんや和明君みたいに、
かっこいい男の子なんて、本当はそんなにいやしないものだ。
夏越君を見て、なんだか、あたしはほっとしていた。

一曲目が始まる。

ドラムもギターも無しの、
低いベースだけの音が辺りに響く。

大志さんがマイクをつかむと、
歌い始めた。

迫力のある歌声。
歌詞は全て英語だから、何を言ってるか分からなかったけれど、
大志さんの歌が、滅茶苦茶上手なのはあたしにも分かった。

「すごい」
舞台の上の大志さんに目を奪われたまま、

あたしが思わず呟くと、
奈津美は隣のあたしをひじで鋭くつついた。
「言ったでしょ」

ふと、あたしは大志さんの腰の辺りから、
何か白いものが下がっているのに気がついた。
良く見ると、それはタオルだ。
「さえ、大志君、あんたのタオル持ってるじゃない」
あたしは目を見開く。

おしりのポケットにでも突っ込んでいるのだろうか、
大志さんが歌うと、タオルもゆれて、
時々、あたしの刺繍した、
緑色の大志さんのイニシャルが見え隠れした。

一曲目があっという間に終わり、
拍手が沸きあがる。

そして、次の曲が始まった。
今度はさっきの楽器の演奏が少ない渋い曲ではなく、
楽くてにぎやかな雰囲気の曲だ。
聞いている観客たちも曲に合わせて手を叩き始めた。
あたしと奈津美も、一緒に手を叩く。

舞台の上の大志さんがなんとも魅力的なのは、
見ているこちらがつられて笑ってしまうくらいに、
本当に楽しそうに演奏をしつつ、歌っていたからだった。

「しかし、まじ上手だ。彼」
隣に立っている知らない女子が呟くのに、
あたしも大きく頷いた。

「Ｉｗａｎｎａ　ｈｏｌｄ　ｙｏｕｒ　ｈａｎｄ，Ｉｗａｎｎａ
ｈｏｌｄ　ｙｏｕｒ　ｈａｎｄ」

笑顔で楽器を演奏しつつ、
舞台の上の三人は、綺麗にハモッている。

ふと、大志さんは歌詞の合間に、ギターを弾く手を一瞬止めて、
片手を前に伸ばした。

その瞬間、大志さんと目が合ったような気がして、
あたしの胸がどきりと音を立てる。

英語が苦手なあたしでも、
この位の歌詞の意味は分かった。

“君の手を握り締めたいんだ”

思わず目を伏せるけど、
あたしはそんな自分を笑ってしまった。
そして、また舞台の大志さんに目を戻す。

大志さんと目があったと思ったのは、
あたしの錯覚だ。

今、この体育館で演奏を聞いている全ての女子が、
きっと同じように思ったに違いない。

二曲目が終わると、拍手は一段と大きくなった。

最後の「Ｌｅｔ　ｉｔ　ｂｅ」。

ふと、大志さんはギターを首から外すと、
舞台の上に置いてあるキーボードへと歩き出す。

そして、大志さんはキーボードに向き直ると、
他の二人と目を合わせてから、静かに弾き始めた。
あたしでも一発でわかる、有名なイントロだ。

ため息をついてしまう。
牛丼屋で大志さんの長くて綺麗な指を見たとき、
ピアニストみたいだと思ったけれど、
やはりそのまんまだったのだ。

ドラムとベースは無かったけれど、
今度の歌は和明君と夏越君がメインだった。
大志さんの迫力のある声とはまた違う優しい声のハーモニーで、
体育館の中は、三人の演奏にすっかり魅了されていた。

三曲目が終了して、拍手の巨大な渦が起こる。
他のバンドの演奏の時とあまりにも違うようだったけれど、
それは仕方のないことだった。

「ね、行こう！」
奈津美があたしの手をつかんで引っ張って言う。
「どこに？」
あたしが言うと、
「今の演奏の感想、言ってあげに行こう！」
奈津美は有無を言わさず、あたしの手を引っ張って歩き始めた。

見ると、舞台裏のあたりは、
女子たちがあふれて、凄いことになっていた。
見ると、あの「ちはる」という子もいるのが見える。
大志さんが来るのを待っているのだろう。

「あたしはいいや。奈津美、一人で行ってきて」
あたしは言うと、奈津美の手から自分の手を外した。

「なに、それ。さえは大志君が好きなんじゃないの？
頑張るって言ってたのは、どうしたの？」

あたしはちらりと、ちはるという子を見た。
カールした綺麗な茶色い髪、小さい卵のような顔に大きな瞳。
有名なお嬢様学校の制服を着た、
まるで韓流アイドルみたいに可愛い子。
あんな子と張り合うなんて、考えただけで無理だ。

「あたし、友達で十分だから」
あたしは笑って奈津美を見て言った。
「大志さんの友達になれれば、それで十分」
奈津美は小さく息をついて、あたしを見て強い口調で言った。
「ちゃんと口に出して伝えて、振られたわけでもないのに。
なんで、そんなに弱気なの？
タオルだって使ってくれてたじゃん」
あたしは肩を小さくすくめて、
「外出て待ってるから」
奈津美に言うと体育館の外へと歩き出した。

口に出して伝えるなんて、
あっさり言えるのは奈津美が可愛いからだ。
和明君に見初められて、告白されるくらい可愛いから。

あたしは自分を良く知っているし、
そして、想像力もある。
そういうことだ。

大志は、片付けたギターのケースを肩に抱えて舞台裏から出る。

ふと流した視線の先に、
さえが体育館から出て行く後姿が目に入った。

「大志、お疲れ！演奏、とっても良かったよ！」
出てくるのを待っていた他のファンの女子たちを押しのけて、
ちはるが大志に声をかけてくる。
「サンキュ」
大志は答えたものの、さえの後姿を目で追ったままだった。

ちはるは大志の視線の先を追う。
そこには、さっき大志と一緒にいた冴えないM女の制服を着た女子が、
体育館を去っていく姿があった。

ちはるはまた大志に視線を戻して、
大志が心なしか元気が無いのを見た。

さっき、大志はあの人を「さえ」と呼び捨てにしていた。

今までは、私以外の女子を呼び捨てにしたことなんて無かったのに。
大志に近づくなんて、絶対に許さない。
ちはるは唇をかみ締めると、踵を返してさえを追った。

8

あたしが一人で体育館を出て、
大志さんに見つからないように、
体育館の出口からは見えにくい柱の陰で奈津美を待っていると、
ふと、声をかけられた。

「大志に近づいても無駄だから」

険のある声。
見ると、ちはると大志さんが呼んでいた、
あのお嬢さん学校のF女の制服の可愛い子が、
あたしを睨むようにして、あたしの近くに立っていた。

また？
一体、何だっていうんだろう。

あたしはげんなりして、大きいため息をつくと、
ちはるという子に向き合った。

「別に、あなたが言う変な意味で、
あたしは、大志さんに近づいてなんかいないけど」
あたしよりも、きっと年下だろうその子に、
なるべく喧嘩口調にならないように、穏やかに言う。

「大志の周りには、私をはじめ、
あなたなんかよりもずっと可愛い子たくさんいるんだから。
名前を呼び捨てにされたくらいで、調子に乗らないでよね」

あたしの穏やかにしゃべろうとする努力も空しく、
まるで噛み付くような口調で、ちはるは続けた。

自分で可愛いって言いやがったよ、とあたしは思いながら、
「調子になんか乗ってないわよ」
あたしの口調にも、少し棘が混ざってしまう。

友達だからと、
名前を呼び捨てされることのどこに調子に乗れって言うんだ。

「大志のこと、好きなくせに」
ちはるは可愛い顔をゆがませて、あたしの事を睨みながら言う。
「好きなんかじゃないわよ。友達だもの」
あたしは思わず、勢いで言ってしまった。

途端、拍子抜けしたように、
ちはるの表情が緩む。

「本当に？」
上目遣いで、ちはるはあたしを見る。

いちゃもんつけられていたのも一瞬忘れてしまうくらい、
ちはるのその表情は可愛かった。

ずるい。
こんな風に可愛く生まれていたら、
あたしだって、さっき体育館の舞台裏で大志さんを待つ集団に、
突入して行っただろうに。

少し黙った後、ちはるはもう一度口を開いた。

「明日の文化祭の打ち上げ、来るわよね？
大志から誘われてるんでしょ？友達なんだから。
その時に、今のあなたのその言葉が本当かどうか、
良く見せて貰うから」
それだけ言うと、ちはるはあたしの前から早足で歩いて去って行った。

「一体、何？」
ちはるがいなくなってから、ふつふつと怒りが沸いてくる。
「何で、あたしがあそこまであの子に言われなきゃならないの？
別にあたしが大志さんと、イチャイチャしてたわけでもあるまいし！」

柱の陰で思わずキーーーッと、地団駄を踏む。
そして足元にあった小さい石ころを、当てつけに蹴飛ばした。

「いてっ」

どこかで声が上がり、あたしは驚いて柱の陰で固まる。
そして、恐る恐る柱から声のした方を覗き見た。

少し離れたところに、
大志さんと和明君、そして夏越君が楽器のケースを抱えていた。
奈津美の姿もあるし、なんとさっきまで話していたちはるもいる。

大志さんが頭に手を当てて、
空を見上げたり辺りを見回したりしている。

もしかして、あたしの蹴飛ばした石が、
大志さんに当たってしまったんだろうか？
あの時、公園で蹴飛ばした缶が当たってしまったかのように？

なんであたしは大志さんに対して、
こんな事ばかりしてるんだろう。

あたしは謝らなければと、フラフラと柱の陰から出て行った。

「さえ！」
奈津美が目ざとくあたしを見つけて声をかける。
その声に、大志さんがあたしを振り向いた。
あたしがフラフラと近づいていくと、大志さんは笑顔になった。
舞台の上で楽しそうに歌っていた時と同じ笑顔。

「演奏、見てくれた？」

あたしが何か口を開く前に、大志さんが言う。
謝るタイミングをはずしてしまって、
あたしは取り合えず頷いた。
「…皆さん、凄く、かっこ良かったです！
大志さんの歌も素敵だった」
あたしの正直な感想を言う。
それを聞いて、大志さんはますます笑顔になった。

奈津美の隣にいた和明君が、気がついたように言う。
「あ、夏越をまだ紹介してなかったよね。
クラスが違うけど、もう長く一緒にバンドやってんだ。
夏越、こちらは内藤さえさん。奈津美の友達。
さえちゃん、こいつは坂井夏越、見た目は地味だけど、
ドラムの腕はすげーやつなんだ」
「見ました、演奏。凄かった！どうしたら、
あんな風に足と両手と別々にリズム刻めるのか、
もう不思議で不思議で」
あたしが感心して言うと、夏越君は落ちてくる銀縁のメガネを手で
直しながら、
照れたように笑った。

あたしと背の高さもあまり変わらない、
男の子としては低いほうかもしれない。
一重でたれ目、見た目はまるで、
バンドなんかやっているように見えない地味な夏越君に、
あたしは何だか親近感を覚えていた。
和明君と大志さんと奈津美とちはるが側にいると、
その四人とあたしと夏越君二人の手前で、
神様にくっきり境界線を描かれているような気さえする。

文化祭の実行委員は、まだまだ仕事があるようで、
あたしと奈津美は、そろそろ先に帰ることにした。

「さえ、ケイタイ教えてよ」
別れ際に思い出したように、
大志さんがポケットから自分のケイタイを出して言う。

ちはるの視線が痛かったけど、
友人の社交辞令として別に断る理由もないし、
第一、大志さんは奈津美の彼氏の親しい友達なんだから、
ここで変な意地張ったことで、奈津美と険悪になりたくないのだ。

あたしは頷くと、自分のケイタイを取り出した。
あたしたちが、通信で情報を交換している間、
和明君の隣で嬉しそうにしている奈津美の顔が、
なんだか照れくさかった。

「打ち上げの場所とか、後で連絡するよ」
通信が終わった後、
にこりと笑って言う大志さんの顔を見上げて、
しみじみ思う。
大志さんは、本当に華やかな人だ。
その他大勢のあたしなんかと違って、
今日みたいに舞台の上なんかが似合う人。

帰り道、奈津美に明日の打ち上げに参加する旨言うと、
にんまりと奈津美は笑った。
「絶対望みあるって！
だって、大志君の方からさえのケイタイ聞いてきたじゃん」
「…いや、そういうつもりでなくて」
と、ちはるとの事を話そうとしたけれど、
そんな事を話したら、奈津美がちはるに何を言うか分からないので、
あたしは黙っていることにした。

明日の打ち上げは、別に大志さんに対して普通に接して、
普通に会話していればいいのだ。
単なる友達として。

奈津美と別れた後、
一人電車の中で、ケイタイを開く。
あたしのケイタイの中に、
上月大志さん名前と、
電話番号とアドレスがしっかり記憶されていた。

大志さんのケイタイの中にも、
内藤さえという名前と、
あたしの電話番号とアドレスが記憶されているんだろうか。
なんだか、それはとても不思議な事に思えた。

ふと、メール着信の明かりが点る。
あたしはドキリとケイタイを握り締めた。
着いたばかりのメールを開ける。

それは大志さんからだった。
「単なる確認です。ちゃんとさえにメール届くかな　？」

「届きました、大丈夫です」
あたしは文の最後に、にこりと笑った顔文字を入れて返信した。
またすぐに返事が返ってくる。
「良かった、じゃあ明日」

このメールは単なる連絡メールだし、
あたしは大志さんの単なる友達だって分かってるけど、
でも、胸がときめくのは、あたしにはどうしようも止められなかった。

9

次の日、文化祭の打ち上げは、
夕方5時くらいから始まっていたようだったけれど、
あたしは家の用事で、開始時間には向かえなかった。
旅行から帰ってきた母親が熱を出して寝込み、
母親の再婚相手、いわゆる義理の父親のご飯を急遽、
あたしが作らなきゃならなくなったからだった。

義理の父親はとてもいい人で、
日曜の夜、予定のあるあたしに食事を作らせるのは、
気が引けているようだったけれど、
あたしはあえて、喜んで作る素振りをしたのだった。
法律上は親でも、まるきりの他人、
上手く一緒に暮らすには、
お互いそれなりに気を使うのはしょうがないことだ。

なので、打ち上げ参加は二次会からになった。
二次会は、駅の近くのカラオケボックスとのこと。
一次会に間に合わなかったあたしに、
奈津美からはまめに心配のメールが来ていたし、
大志さんからもメールがあって、正直とても嬉しかった。
だけど、一次会に来なかったあたしが二次会に現れるのを見て、
がっかりする面子が一人いるのは確信していた。
ちはるだ。

私服姿は気恥ずかしかったけれど、
手持ちの中で一番自分に似合うと思うワンピースを着て行った。
特別よそ行きというわけではないけど、
フレアの裾が可愛い、シックな感じのお気に入りのデザインだ。
髪も軽く巻いて、薄い口紅をした。

カラオケボックスまで行くと、
奈津美にメールをする。
「今から中に入るから」
すると直ぐに奈津美から返事が返ってくる。
「和明と喧嘩したから、私はもう帰る」

「ええっ！！」
あたしはカラオケボックスのフロントで、
絶叫してしまった。

奈津美が帰るなんて、あたしどうしたらいいのよ？

なんて思っていたら、階段を下りてくる奈津美の姿が見えて、
あたしは奈津美に駆け寄った。

「奈津美！和明君と喧嘩ってどうしたの？」
あたしが言うと、
「だって、他の女といちゃいちゃしてるんだもの。
超むかつく！ごめん、さえ。今日は帰るから。ごめんね」
目に涙を浮かべて、奈津美はあたしの手を振り切ると、
カラオケボックスを出て行った。

あたしは唖然と奈津美を見送る。

すると、和明君が階段を走って降りてきた。
奈津美を追ってきたのだろう。

「奈津美、出て行った？」
和明君が短くあたしに聞く。
あたしは頷くと、店の外を指差した。

「奈津美が何を言ったか知らないけど、奈津美の勘違いだから。
奈津美の親友のさえちゃんには、ちゃんと言って置く」
和明君の真摯な言葉に、あたしは笑顔になる。
「分かってる、早く行ってあげて！」
あたしが言うと、
和明君は慌てて、奈津美の後を追って店の外へ駆けて行った。

きっと、和明君の言葉は本音だ。
あたしは確信していた。

二人が出て行った店の入り口を見て、
羨ましいなと思う。
ちょっとした喧嘩でさえ、
恋人同士の物ならロマンティックなのだ。

あたしはため息を一つつくと、
さて、この後どうしようかと考えた。

奈津美もいなくて和明君もいない。
何人が二次会に来ているのか知らなかったけれど、
知っている人は、大志さんと夏越君と、

あのちはるだけだ。

大志さんには会いたかったけれど、
気が重かった。

ふと、ケイタイの着信音が鳴る。
メールだ。

大志さんからだった。

「もう来れそう？」

短いメールだけれど、正直とても嬉しい。
あたしの事を少しは待っててくれたのだろうか。

少し迷った後、あたしは返事を書いた。

「実は、もう入り口まで来てます。
だけど、奈津美が帰っちゃって、あまり知っている人いないし、
入りづらいかなって」

すぐに返事が来る。

「迎えに行くから、待ってて」

胸がドキンと音を立てた。

なんか、彼氏彼女っぽいやりとりで、

頬が緩んでしまう。

つと、あたしの脳裏に、
ちはるの顔が浮かぶ。

いけない、いけない。
妄想に走ってはいけない。

大志さんが迎えに来てくれるのに、深い意味なんか無いのだ。
きっと、気を使ってくれているんだろう。
あたしは自分に言い聞かせた。

でも、胸の鼓動は一向に収まってくれない。
ドキドキしながら、あたしが待っていると、
すぐに大志さんが階段から現れた。

昨日のバンド演奏の時の感じとも違う、
チェックのシャツにチノパンという、
ラフな私服姿の大志さんに、
あたしの鼓動はますます高まるけれど、
あたしはなるべく、なんてことない風を装って、
大志さんにぺこりと頭を下げた。

大志さんが足を止めて、じっとあたしの格好を見ている。
「さえって私服になると、感じが変わるね。違う人みたいだ。
　可愛いよ似合ってる」
大志さんは、言いながら近づいてくる。

かーっと、自分の顔に血が上るのが分かる。
きっと、あたしは耳まで真っ赤になっていたに違いない。
「あ、有難うございます」
まるでロボットのようにぎこちなく、あたしはまた大志さんに頭を下げた。
そんなあたしを見て、大志さんは面白そうに、
いつもの調子で、ぷっと小さく笑った。

「行こう、皆、適当に盛り上がってるから。
今日はさえの歌、聞かせてよ」
大志さんが言いながら階段を上る後を、あたしもついて行く。

広めのボックス。

大志さんがドアのハンドルに手をかけて開けるのを、
あたしは後ろで緊張しながら見ていた。

たった今、中でかかっている曲が、
大音量で外に流れ出してくる。
大志さんとあたしが部屋の中に入っていくと、
部屋の中には１０人位がいて、それぞれ歌を歌ったり、
話をしたりして楽しそうにしていた。

「あっ、大志！！誰連れて来たんだよ！」
知らない男の子が声をかけてくる。

「もしかしてー、彼女？」
知らない女の子も、冷やかすような口調で言う。
ふと、ソファに座りながら、
あたしをじっと見ている視線に気がついて、
あたしはそれが、ちはるなのを知った。

今日はお嬢さん学校のＦ女の制服ではなく、
タイトなミニスカートとフリルが愛らしいブラウス姿。
目を細めてあたしを見ている視線には、
来なきゃ良かったのに、というあからさまな意思が見えている。

そっちがあたしの大志さんへの友達っぷりを確認したいから、
打ち上げに来いって言ったんじゃないか！

あたしはぐいっと一歩、大志さんの前に出ると、
声をかけてきた人達に、ぺこりと頭を下げた。

「大志さんの友達の、内藤さえです。
今日は、お邪魔します」

友達って言葉に、
「単なる」的なニュアンスをたっぷり持たせてあたしが言うと、
声をかけてきた人達は、中途半端な笑みを浮かべて、
肩をすくめた。

なんだ、という声が聞こえて来そうだ。

あたしはどうだと、ちはるを見る。
ちはるは、あたしから視線をぷいとそらした。

その後、何気に大志さんを振り返ると、
大志さんは、妙に真っ直ぐな視線であたしを見ていた。
何か言いたげなのは、きっとあたしの気のせいだろう。
けど、なんだか、あたしはいたたまれなくなって、
大志さんから視線をはずすと、部屋の中を見まわした。

その時、誰かが大志さんの名前を呼んだ。
次に大志さんのリクエストした曲がかかるようだった。
大志さんがマイクの方に行くのを見て、
あたしはほっとすると、自分が座る席を探した。

夏越君を見つける。
私服のTシャツとジーンズは、
昨日のバンド演奏の時の格好と似ていたし、
たれ目で銀縁メガネ、地味な感じは同じだった。
あたしは、唯一の仲間を見つけたような気がして、
夏越君の脇の空いている席に腰をかける。

「昨日お会いした内藤さえです、覚えてくれてます？」
最初から親しみ全開で挨拶すると、
夏越君は頷いてくれた。

大志さんの歌が始まる。
ラルクアンシエルの「瞳の住人」だった。
難しいラブソング。
けれど、大志さんは完璧だった。

辺りで騒いでいた面々も、
大志さんの歌に、静まり返る。

きっと。

あたしは思う。
例え、最初が最悪な出会いだとしても、
あたしは、大志さんにあの時、
あの公園で缶を蹴飛ばして、大志さんにぶつけなければ、
こうして、大志さんの素晴らしい歌を聞ける事も無かった。

だから、この先、
友達以上に進展がなくても、
それでも、こうして側にいられるだけで、
あたしは本当にラッキーなのかもしれない。
こんなに素敵な人の側にいられるのだ。

もう、あたしは自分の心に嘘はつけなかった。
あたしは大志さんが、大好きだった。
恋焦がれていた。

大志さんの歌が終わる。
大拍手が起こって、大志さんは照れてぺこりとお辞儀をした。
その後、近くにいた知り合いに捕まって、
そっちに大志さんは座る。

あたしは気落ちしている自分に苦笑した。
カップルならいざ知らず、
友達なんだもの、そんなにべったり一緒にいる理由は無い。

あたしは隣にいる夏越君に向き合う。
聞きたい事があったから。

「夏越君、どうして大志さんや和明君とバンドを組むようになったの？」
純粋な疑問だった。
決して本人には言えないけど、

あたしが共感を持つようなルックスの夏越君と、
ファンクラブまでいるような大志さんと和明君とが、
バンドを組むことになった経過が知りたかったからだった。

「ああ、それはね」
夏越君がメガネに手を当てて、答えてくれるのに、
あたしは身を乗り出して聞き入る。

「俺ら、T大の医学部を目指してて、
中学から同じ塾に通ってるんだけど、
そこで知り合って、意気投合したんだ」
たれ目で銀縁メガネで、地味な容貌の夏越君がさらりと言う。
「は？」
あたしは絶句した。

T大ってのは、
日本で三本の指に入る国立大だ。
それこそ、そこに入った人たちは、
末は博士か大臣かっていう人種の通う大学だ。
そういえば、Y高は進学校の男子校だと聞いたっけ。

「あれ？大志から聞いてない？
俺たち、三人とも親が病院経営してるからさ、
しょうがなく、跡とるために医者を目指してるんだ。
なんか、自分で自分の人生がままならない鬱憤っていうか、
でも、親の期待に答えたいっていうか、
そんな葛藤が共通してさ。三人とも楽器が得意なのもあって、
ストレス発散にバンド組んだんだ」

あの時感じた、神様の線引きを、
あたしはあたしと夏越君の間に、
きっちり引かれているのを感じた。

医者を目指している。

大志さんと和明君だけではなく、
夏越君までも。
正真正銘、エリートなのだ。

バンドなんて、
所詮、息抜きなんだろう。

衝撃を受けたついでに、
あたしは口を開く。

「夏越君、彼女いる？」
万が一という、期待を込めて訊く。
せめて、いないと言ってくれれば、
まだしも、あたしは正気を保てるかもしれない。

大志さんや和明さんのバンド仲間だけれど、
お医者様を目指しているエリートだけど、

でも、彼はあたしみたいに地味なルックスなのだ。
彼女がいなくて、いいはずなのだ。

「うん、いるよ」
でも、あっけらかんと、夏越君は答えた。
あたしは一瞬、絶句した。

でも、なんとか口を開いて聞く。
「他の高校の女の子？」

Y高は男子校だ。当然、彼女がいるとしたら、
他校だろう。
そんな事を思っていると、
夏越君は続けてあっけらかんと答える。
「A女子大。一つ上なんだ」

A女子大は、F女と同じくらい、
お嬢様の通う女子大だ。

その言葉を聞いて、
あたしの魂は、あたしの口を勢い良く出て、
カラオケボックスの天井をさ迷った。
それくらい、ショックだった。

あたしは必死で笑顔を作った。
「凄いね！年上の彼女なんだ」
白々しい口調になるのは、もうどうしようもない。

結局、やっぱり、
大志さんとあたしの世界は交わらないのだ。

見た目、あたしと同じように地味な人と思えた、
大志さんの友達の夏越君とでさえも、
あたしの世界は交わらないのだから。
というより、夏越君は、
大志さんよりも、
あたしから遠い世界にいるじゃないか。

一種、ショック状態だった。

「あんたらいつの間に、
そんなに仲良くなってんの？」

呆然としているあたしのすぐ横に、
ドスンと音を立てて座る人がいる。

あたしがショック状態のまま隣を見ると、
それは大志さんだった。

10

「いや、なんかもう」
あたしは茫然自失したまま、言う。
「夏越君は凄いっていうか、尊敬しちゃうって言うか」
あたしの言葉に、大志さんは一瞬黙った後、
ふーんと肩をすくめて、あたしたちの前にあるポテトフライをつまんだ。

隣にぞんざいに座った大志さんの足の腿が、
あたしの足の腿に触っている。
ワンピース越しに、そのぬくもりが伝わってくるけれど、
そのぬくもりは、今のあたしには胸が痛いだけだった。
あたしは何気に体をずらして、
その大志さんのぬくもりから、離れた。

「夏越、何か歌えよ」
いつもと違う何だか不機嫌な感じで、大志さんは言う。
「ご心配なく、次は僕が入れた曲がかかるから」
あたしと大志さんの微妙な雰囲気など全く気にせず、
夏越君は言った。

ゆずの「栄光の架け橋」がかかる。
夏越君は席を立って、マイクに向かった。

大志さんは、ため息をついて、

体の後ろに両手をつく。

その左腕は、隣に座るあたしの右の腕に、
容赦なく触れた。
密着といってもいいくらいだ。

あたしの心臓は、
パニックを起こす寸前だった。
せっかく足から離れたのに、
今度は腕。
続けてよけるのも何だか出来なくて、
あたしはそのままじっとしていた。

夏越君の歌は、
バンド演奏で「Ｌｅｔ　ｉｔ　ｂｅ」を歌った時と同じ、
優しい声色だった。
また大志さんと違う感じだけど、
やっぱり凄く上手だ。

あたしはしみじみ、思う。

どうして、天はあたし以外の人に、
二物も、三物も与えるのか。

同じ人にいくつも与えてしまうから、
あたしには、一つもプレゼントが回ってこないのだ。

「夏越って、さえの好みのタイプ？」
大志さんが、あたしを見ないで聞いてくる。

夏越君の歌は、さびにかかっていて、
その澄んだ綺麗な声に、
大志さんが歌った時と同じように、皆聞き惚れていた。

あたしは大志さんの言葉に驚いて、
隣に座る横顔を見上げる。

大志さんは、あたしから顔をそむけて夏越君を見たままでいるので、
どんな表情をしているのか、よく見えなかった。

思いもかけない質問に、あたしの胸の鼓動はマックスになる。
「いや、別に、好みとかそういうわけでは」
あたしはうろたえて、しどろもどろに尻つぼみに言って俯いた。
「そう」
感情の無い、大志さんの声が返ってきた。

ふと、部屋の扉が開き、店員が飲み物を運んでくる。
注文した人たちが、それぞれ自分の飲み物を受け取った。

大志さんもグラスを二つ受け取って、
一つをあたしの前に置いた。
別に何事もなかったかのように、
いつもの口調に戻って、声をかけてくれる。
「オレンジジュースで良かった？」
あたしは金縛り状態から顔を上げて、
目の前に置かれたグラスを見た。
「あ、有難うございます」
大志さんがあたしの分まで注文してくれていたらしい。
本当に優しい人なんだ。
あたしは心を込めて、お礼を言った。

大志さんは何やら真っ青な液体の入ったグラスを持っていて、
あたしはその色のどぎつさに目を見張った。
「ね、なんか凄い色だよね。ノンアルコールのカクテルなんだって」
大志さんが面白そうに言って、持っているグラスのストローに口をつける。
「うわっ、味、微妙！」
笑いながら言う大志さんに、あたしもつられて少し笑顔になる。
「飲んでみる？」
気軽な感じで、大志さんは自分のグラスをあたしに差し出した。
刺さっている白いストローが、あたしの方を向いている。

あたしの心臓が飛び跳ねた。
それはたった今、大志さんが口をつけたストローだからだ。

あたしはストローから目を上げて、ちらりと大志さんを見る。
大志さんは別になんてことないというように、小さく首をかしげて、

あたしが行動を起こすのを待っているようだった。

落ち着け、さえ。
きっと、大志さんはこんなこと慣れてるんだ。
友達同士なら、回し飲みなんて当たり前だから。
あたし達だって、女同士ならやるじゃないか。
だから、男女だって友達同士なら、
回し飲みなんか、極めてごく普通の事なんだ。
かえって、ここで味を見るのを断る方が、
不自然なのだろうし。

あたしは心臓爆発寸前の胸を押さえて、
ストローに指を伸ばすと、口をつけた。
吸うと、甘いような苦いような、
不思議な冷たい液体が、口の中に入ってくる。

「ね？微妙っしょ？」
大志さんが笑って、あたしの顔を覗き込む。
あたしも頷いて見せるけど、
大志さんの形のいい唇に、あたしの視線は吸い寄せられていた。

この唇と、間接キスしたんだ！
もうパンパンに脹れたあたしの心臓は、限界だった。

「ごめんなさい、ちょっとトイレに」
あたしが呟くように言うと、大志さんは笑顔のまま頷いて、

通れるように場所を開けてくれる。
あたしはバックを引っつかむと、
部屋の中から飛び出した。

女子トイレに飛び込む。

綺麗に掃除されている洗面台の鏡に向き合って、
あたしは、真っ赤になっている自分の顔と向き直った。

落ち着け、さえ。
大志さんにとっては、こんなことって何てこと無いんだ。
あたしが勝手に意識してるだけなんだから。

それでも、胸の鼓動は収まらない。
その切ない痛みに、あたしはしばらくの間息を止めた。

ふと、女子トイレの扉が開く。
振り向くと、ちはるが仁王立ちになり、
腕を組んで立っていた。

可愛い顔は青ざめている。
細められた目は、怒りで鋭く光っていた。

「どこが友達よ。
ニヤニヤにやけて、大志の側に陣取ってベタベタして」

声を震わせて、ちはるがあたしに言う。
あたしは呆気に取られて、一瞬言葉を失った。
そして、気を取り直して口を開く。
「別に、あたしは大志さんとベタベタなんて」
「同じストローで、一緒の飲み物飲んでたじゃない！
最近は、私にだって大志はそんなことしないのに」
あたしの言葉を遮って、ちはるが叫ぶように言う。
その剣幕に驚いて、あたしは口を閉じた。

「あんたが現れるまでは、大志の側には私がいつもいたんだから。
大志の側には、私だけだったんだから。
それがなによ、ひょいって現れて、大志の友達面して側にいて、
そのうち、隙があれば大志に言い寄ろうってしてるんでしょう。
見え見えなのよ！」

怒りで真っ赤になったちはるの目に、涙が浮かんでいる。

あたしはその表情を見て、
どんなに、ちはるが大志さんを好きなのか、
理解した。

「私はずっと小さい時から、
いつか、大志のお嫁さんになる事だけを考えて生きてきたの。
ずっとずっと大志だけを見てきた。

あんたみたいなブスに、横から大志を取られるなんて絶対許さないのよ！」

ブス、という遠慮の無い言葉に、
さすがのあたしも、堪忍袋の緒が切れる。

「あのさ、告白する相手、間違ってるんじゃない？」
冷静を装うけど、あたしの腹の中は、段々と怒りが沸いていた。

「小さい頃からずっと幼馴染で、大志さんの側に当たり前にいて、
大志さんに妹みたいに可愛がられてるらしいけど。
それだけで満足出来ないなら、満足出来ないって本人に言えばいいじゃない」

あたしが強い口調で言うと、ちはるはひるんで唇を噛んだ。

年下の子に、これ以上きつい事を言うのはやめようと、
理性はあたしを説得していたけれど、
もう止められなかった。

「どうせ、幼馴染の関係が変化して傷つくのが怖いからって、
大志さんに告白出来ないんでしょう？
恋人にはなりたいけど、可愛い妹の立場も失いたくない？
そんなせこい自分可愛さのためなんかに、あたしに当たらないでよ！」

あたしは思わず、叫んでしまう。

「あなた、見た目、滅茶苦茶可愛いいじゃない。

学校だって、三流の県立高校のあたしと違って、
F女に通ってるお嬢様だし、
その上、大志さんと幼馴染として過ごしてきた長い時間だってあるわけでしょう？
可愛い妹みたいなものだって大事に思われているなら、
告白したって、これきり会えないとかいう関係になるわけなんかないじゃない。
何をそんなに怖がってるのよ」

一息に言うと、あたしは少し口を閉じる。
ちはるは黙ってあたしの事を見ていた。

「それに比べれば、あたしなんて、大志さんとは出会いも最低だったし、
いつも大志さんの前では、ヘマばっかりやらかしてるし、
見た目が可愛くないのだって、重々承知だわ。
ただ、大志さんは優しいから、あたしを友達にしてくれただけで、
あなたとはまるきり立場も違う、単なる通りすがりみたいなもんなんだから」

最後の方は、あたしの口調のトーンは落ちていた。

そう、それだけのことなんだ。
改めて言ってしまうと、
あたしの中でそれは動かしようのない事実になった。

そう、今日のこの文化祭の打ち上げが終われば、
学校も違うし、次にいつ会えるかなんて分かりはしない。
ましてや大志さんに、ちはるのような彼女ができたとしたら、

友達としてでも、もう会うこともないかもしれない。

「だって」
ちはるがさっきまでの勢いを失って、
涙を浮かべた目であたしを見る。
「大志が、呼び捨てにしてたから。さえって」
ちはるは、本当に可愛い子だ。
あたしが男の子だったら、こんな瞳で見られたら、
一発ノックアウトだろう。
「あなただって、大志さんに呼び捨てにされてるし、
大志さんは、夏越君だって呼び捨てしてるよ」
あたしは力なく言った。

「私、大志と付き合いたいの。ちゃんと恋人として」
ちはるの真摯な言葉が、あたしの胸を貫く。
あたしは小さく苦笑した。
「だから、そんなのあたしに言ってどうするっての」
あたしは強がった口調で言うと、
ちはるから顔をそらして鏡に向き直った。
リップを付け直すためにバックに手を入れる。

女子トイレの扉が開けられた。
閉まる直前、ちはるの小さい声がかすかに聞こえる。
「告白してくる」
あたしは、ちはるを見なかった。
かすれた声が続けて言った。
「…ありがとう」
そして、女子トイレの扉はぱたりと閉まった。

お礼なんて、言われる筋合いは無い。
リップを塗りなおしている自分の唇が、
小さく震えているのに気がつく。

泣くもんか。
あたしは単なる大志さんの友達なんだから。

瞬きを繰り返して、
あたしは鏡の中の自分の情けない顔を、
しばらく睨んでいた。

了

気持ちを冷静に保てるまで、
あたしはトイレの中で、結構長い時間を過ごしていた。

正直、ちはるが出て行った後すぐに、
部屋に戻る勇気が無かったのだ。

ちはるが大志さんに告白するシーンに遭遇するのは、
絶対に嫌だったし、
その上もし、告白が成功するところまでを見せられてしまったら、
ちはるに強がっていたわりに、
あたしは、絶対に立ち直れないような気がしていたからだった。

ふと、ケイタイが光る。

「少し席外すけど、帰ったわけじゃないから」

大志さんからのメール。
あたしの心臓が締め付けられるように痛んだ。

やっぱり、ちはるは大志さんに告白をするんだ。

あたしはメールには返信はせず、
ふらふらとトイレを出ると、

カラオケの部屋に戻って行った。

部屋に戻って夏越君の隣に座る。
案の定、部屋の中に大志さんとちはるの姿は無かった。

でももしかしたら、大志さんが席を外したのは別の理由かもしれない、
などと、かすかな希望にしがみついて、
あたしは名越君に聞いた。
「大志さんは？」
「ああ、さっき、ちはると出て行ったよ。
なんだろうな。告白だったりして」
冗談ぽく、あっけらかんと言う夏越君の言葉に、
あたしの胸はずきりと痛んだ。

「さえちゃん、何か歌ったら？」
夏越君がリモコンを渡してくるけど、
あたしは力なく左右に首を振って断った。

それからじりじりと、時間は過ぎて行った。
でも、１０分経っても、１５分経っても、
大志さんは戻ってこない。

誰かが失恋の歌を歌っているのを聞いて、
あたしは自分の涙腺が緩んだのを知った。
慌てて、歌にあわせて手拍子をして、
楽しい振りをしながら、瞬きをして涙を散らす。

３０分経っても、大志さんは戻ってこなかった。

「今入ってる数曲で、二次会は終了！次は進藤んちでダーツな！
来れるやつは参加してくれ！」

幹事が叫んで、次の曲がかかる。

腕時計と入り口のドアを見比べて、
あたしはうな垂れた。

もし、ちはるの告白を断ったなら、
大志さんが戻ってくるのに、こんなに時間がかかるわけがない。

あんなに可愛い子に、真剣に好きだと言われたら、
どんな男の子だって嬉しいんじゃないだろうか。
少なくとも、あたしが男の子だったら嬉しいし、
他に好きな人がいなかったら、付き合ってみるだろう。

時計の針は、大志さんがいなくなって５０分を過ぎた。

帰ろう。
もう大志さんは、きっと戻って来ないだろう。

今かかっている曲が終わったら部屋を出ようと、
あたしはバッグを手に取った。

その時、入り口のドアが開いて、
大志さんが息を切らして入ってくる。

「お、大志！もうそろそろ二次会終わるぞ。
次は進藤んちでダーツだからな！
それにしても、一体お前、どこ行ってたんだよ！」
幹事の男の子が、大志さんに向かって叫ぶ。
「悪い、悪い。ちはる送ってきた」
部屋の中に冷やかすような声が上がる。
「そりゃ、優しいことで！」
「俺はいつでも、誰にでも優しいの！」
照れたように大志さんが答えるのに、
あたしの胸がまたずきりと痛んだ。

誰にでも優しい。うん、確かにそうだ。

ふと、あたしはあたしの目から、

音も立てず涙がぽろぽろと溢れているのに気がつくと、
驚いて皆に背を向けて壁に向いた。

涙は後から後から、溢れ出てくる。

ああもう、無理だ。

まわりに分からないように、手のひらで一生懸命涙を拭いながら、
あたしは冷静に思っていた。

こんなに好きになってしまった以上、
もう、大志さんの友達でいるのは、
辛すぎる。
やめよう。
大志さんの友達でいること。
こんなに辛いなら、
会えなくなってしまって、諦める方がずっとましだろう。

あたしは絶望的な思いで決めていた。

「良かった、皆がいる内に戻ってこれて」
明るい声で言いながら、大志さんがあたしの隣に腰掛ける。

あたしはまだ頬を流れる続ける涙をどうしようもなくて、
俯いていた。

「あれ、どうした？」
大志さんがあたしの様子に気がついて、
その声色は途端、心配げなものに変わる。

泣いてる本当の理由なんて、言えるわけがない。
あたしは咄嗟に、テーブルの上に乗っていたピザを指差して、
「タバスコがかかり過ぎてたらしくて、からくて、からくて」
頑張ったけれど、言葉の最後の方は泣き声になってしまった。
でも表情だけはなんとか、泣き笑いを浮かべることに成功する。

「からくて泣いてたの？なんだ、あー、びっくりした」
大志さんは笑顔になって、
「本当にさえって、面白いよな」
持っていた自分のバッグからタオルを出すと、
あたしに差し出した。

その白いタオルは、
あたしが上げたあの緑のイニシャルの入っているタオル。
気がついてタオルをじっと見ているあたしに、
大志さんはにっこりと笑った。
「すごく、気に入ってるよ。
　貰ってから、ずっと持って歩いてる」
と言って、あたしの涙をそのタオルで拭いてくれた。

あたしはぺこりと頭を下げた。

そっか、あたしが大志さんの友達をやめて、

もう二度と会えなくなっても、
このタオルは大志さんと一緒にいられるのか。
それで、十分だった。

カラオケの曲が、全て終わる。

会費を集め終えると、
ぞろぞろと皆は部屋の外へと出だした。

「ダーツかぁ、久しぶりだな」
ダーツを投げる格好をしながら、
大志さんは無邪気に言っている。

あたしはさっき決めた事を、
実行に移そうと口を開いた。

声が震えてしまう。

「大志さん、少しお話が」
勇気を出して言うと、
大志さんは何故か、目を見開いてあたしを見た。

「今日はなんだろう」
少し照れて小さく呟くと、
大志さんは、あたしに真っ直ぐに向き合った。
そして、あの綺麗な笑顔であたしを見る。
「いいよ、何？話って」

ボックスの部屋から誰もいなくなるまで待って、
あたしは思い切って、口を開いた。

「友達をやめさせて下さい」

あたしはかすれる声で、でもきちんと言い切ると、
大志さんに頭を下げた。
しばらくして、恐る恐る大志さんの顔を見る。
大志さんの顔からは笑顔が消えていた。

大志さんが、小さくため息をつく。
怒っているのだろうか。

そりゃそうだ。今まで散々迷惑かけたあたしなのに、
それでも、好意で友達になってくれたってのに、
恩を仇で返すようなものだ。

「じゃ、俺も友達やめる」
大志さんが言った。

自分で決めた事なのに、
同じことを、はっきり大志さんから言われてしまうと、
胸がずきりと今までに無く痛んだ。
止まった涙がまた出てきそうになる。

あたしはもう一度小さく頭を下げると、
部屋から出て行こうと踵を返した。

「付き合ってよ」
背中越しに、大志さんの声が聞こえる。

あたしは、大志さんを振り返った。
真面目な表情で、大志さんはあたしを見ている。

付き合うって、三次会のダーツ？

あたしは小さく首を横に振った。
大志さんの顔色が変わった気がして、
あたしは首を傾げた。
そんなに三次会のダーツ、一人で行くのが嫌なんだろうか。

「あたし、ダーツはやった事ないし。やってもきっと、
鈍いから、上手に出来ないだろうし」

ぼそぼそと呟くように言うと、
大志さんは次の瞬間、噴出した。
そして、そのまま笑っている。

あたしは何が起きたのか分からなくて、
眉をひそめて、大志さんを見ていた。

「本当に、さえって天然だよな。
　ま、そんなところが好きなんだけど」
大志さんは言って、あたしをじっと見る。

え?
大志さん、今なんて言った?
好き?

あたしは意味が理解出来ずに、
呆けたように大志さんを見ているだけだった。

大志さんがあたしに近づいて来て、
唇に笑みを浮かべたまま言う。

「昨日、バンド演奏のとき、
　Ｉ　ｗａｎｎａ　ｈｏｌｄ　ｙｏｕｒ　ｈａｎｄって、俺が歌いながら手を差しのべてたのは、
　あんたにだったんだ。分かってた?」
そして、あたしに向かって片手を差し出す。

これは一体どういうことなんだろう。
あたしの頭はすっかりショートしてしまっていて、
何も言えないし、何をする事も出来なかった。

大志さんは、立ち尽くしているあたしの片手を取って握った。

「俺と付き合ってよ」

大志さんの大きい手のひらがあたしの手の平を包み、
牛丼屋で見惚れた、あの長くて綺麗な指があたしの指を握っている。
胸がときめく温かい大志さんのぬくもり、
今は直に肌から肌へ伝わっていた。

１０秒ほど、たっぷり時間がかかった後、
大志さんの言葉を、あたしは鈍る頭でようやく理解した。

「ええっ？」

途端、素っ頓狂な声が出てしまう。
そんなあたしを見て、大志さんはまた噴出した。
「何だよ、そのリアクション」
大志さんの爆笑が続く。
「さえといると、本当に退屈しないよ」
笑いながら、大志さんは続けた。
「多分、最初に会った日から、俺はあんたに惹かれてたんだ」

出会った最初の日。

その日、あたしに起こった出来事が、
何もかも面白くなかった上に、
しまいには理不尽にも、痴漢にさえ遭って頭に来ていて、
駆け込んだ公園で、八つ当たりで蹴飛ばした空き缶を、
大志さんに当てた日。

公園の芝生に寝そべっていた大志さんが、
空き缶をぶつけられて振り返った。
あの光景が甦った。
空き缶を蹴飛ばした張本人のあたしを見て、
大志さんは、最初は怒った表情をしていたのに、
あたしが泣いていたのを見たら、
あれ？という顔をしたのを、
今でもはっきり覚えている。

あたしの顔にカーーーッと血が上っていくのが分かる。
そんな事って、あるんだろうか。

あたしが好きになった人が、
あたしなんかを好きになってくれるなんて事が、
果たして、この世に有り得るんだろうか。
ましてや、大志さんみたいに、

素敵な人に。

ふと、あたしはちはるを思い出した。
瞬間、舞い上がった気分は、すっと落ちた。

「でも、ちはるちゃんは?大志さんに告白するって言ってたけど」

大志さんが驚いた顔をする。
何故、知っているんだろうと思っているのだろう。

「あたしは大志さんの友達だっていうくせに、
側にいてベタベタしてるのが気に食わないって、
ちはるちゃんに言われたから、
女子トイレで、ちょっと言い合いになって。
だから、あたしに大志さんの事が好きだとか、
恋人になりたいとか言ってないで、
本人に言えって、あたし勢いで言っちゃったから」
あたしが俯いていると、
「ああ、そうだったんだ」
大志さんは、納得したように言った。

「確かに、ちはるには付き合って欲しいって、
さっき告白されたけど、
俺には今、好きな人がいるから断ったよ」

大志さんの言葉に、あたしは俯いたまま、
顔を上げられなかった。
手を握られているぬくもりが、
あたしの全部を包みつつあった。

「さえは、俺が嫌い？」
大志さんの言葉に、あたしは答えられなくて、
ただ黙って大志さんを見た。
「俺より、夏越の方がいい？」
思いもよらない言葉に、あたしは全身全霊、
首を横に振る。

あたし達の間に、たっぷりと沈黙が流れる。

「俺は、さえ、
あんたともっとお互いに知り合いたい。
一緒にいると楽しいから」

また、お互いの間に沈黙。

「さえ、あんたはどうなの？
俺のこと、どう思ってる？」

大志さんの不安とあたしの不安は、

結局一緒だったのだと、
あたしは知った。

大志さんがあたしをどう思っているのか、
とても不安だったように、
大志さんだって、あたしが大志さんをどう思っているのか、
不安だったのだ。

恋愛っていうのは、
不安の要素だけで出来ているのだろうと、
あたしは思う。

刹那な積み木みたいなもの。
タバコの煙みたいに、不安定で、
気持ちの風向きには、否応なく流されてしまう。
でも、勇気を出して確かめ合えば、
煙の積み木は、即座に硬い手ごたえのあるブロックに変わるのだ。

「あたしも、出会った時から、
　ずっと、大志さんが好きだったから」

なんとか言葉を口から押し出す。
あたしの目から、涙が流れ始めた。
でもそれは、安堵の涙だった。
あたしの正直な気持ちを伝えられたという、

安堵の涙。

「なんだ。俺たち両思いじゃん」
大志さんが、明るく優しく言う。
あたしも涙を拭いて、
笑顔になって、大きく頷いた。

「これからよろしく。俺の彼女さん」
大志さんは面白そうに言うと、
唇の端に笑みを浮かべたまま、あたしに顔を寄せた。

戸惑うけど、戸惑うけど。

でも、もうあたしは、
自分の想いから逃げなかった。
目を閉じる。

次の瞬間、
決して交わらないだろうと思っていた、
あたしと彼の世界は、重り合った。

fin.

了（後書き）

最後まで、お付き合い下さった方々、
有難うございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6323x/

あたしと彼の世界（続・あたしの世界）

2011年10月21日09時59分発行